

志教育参考資料集

大河原教育事務所管内の偉人
～夢をもち、志を成し遂げた郷土の人々～



宮城県大河原教育事務所

書：佐藤 奎山 氏

発刊にあたって

この度、「大河原教育事務所管内の偉人～夢をもち、志を成し遂げた郷土の人々～」を当所管内各市町教育委員会、小・中学校の協力のもとに発刊できましたこと、大変うれしく思います。

さて、みやぎの志教育は、今年度、実践を累積するとともに、年間指導計画作成に着手し、いよいよ本格的な取組が始まりました。みやぎの志教育については、教育関係者はもとより、多くの保護者や県民の皆様から「ずっとこのような取組が本県でなされることを期待していた」との声が宮城県教育委員会に寄せられております。

みやぎの志教育とは、「小・中・高等学校の全時期を通じて、人や社会とかかわる中で社会性や勤労観を養い、集団や社会の中で果たすべき自己の役割を考えさせながら、将来の社会人としてのよりよい生き方を主体的に求めさせていく教育」であり、「社会的存在としての人間の生き方の観点を重視し、社会の中で自分ができることや果たすべき役割は何か、そしてその実現のためにどのような取組が必要かなどについてより深く考えさせるもの」です。

人は、先人の経験や言葉、生き方に触れることで、生きることの意味や価値を見出し、それを自己の姿に投影しながら将来の職業や生き方について考えます。そして、その実現のため、社会の中で自己を生かしながらより価値の高い生き方を求め、生涯学び続ける意欲をもつようになるのです。

今回まとめた45人の身近な郷土の偉人の方々の「生き方」を子どもたちが学び、その業績を理解することは、「社会における自分の役割や、人とのかかわり方」を深く考えるよい機会となるはずです。そして、先人に感謝しながら、自分の夢を志に高め、自らの「生き方」を主体的に探究していってくださることを期待してやみません。

結びに、資料集を作成するにあたり、お忙しい中、資料を提供してくださった関係各位に敬意と感謝を申し上げます、発刊のことばといたします。

平成24年2月

宮城県大河原教育事務所

所 長 桂 島 晃

目 次

| | | | | | |
|---|-------------------|-----------|------|---|-----|
| 1 | 発刊にあたって | 大河原教育事務所長 | 桂島 | 晃 | |
| 2 | 大河原教育事務所管内の偉人 | | 市町名 | | ページ |
| | 片平観平(かたひらかんぺい) | | 白石市 | | 1 |
| | 佐藤孝郷(さとうこうぎょう) | | 白石市 | | 2 |
| | 玉虫左太夫(たまむしさだゆう) | | 白石市 | | 3 |
| | 吉野臥城(よしのがじょう) | | 角田市 | | 4 |
| | 毛利萬之助(もうりまんのすけ) | | 角田市 | | 5 |
| | 荒井悟一(あらいごいち) | | 角田市 | | 6 |
| | 佐藤基(さとうはしめ) | | 角田市 | | 7 |
| | 高山善右衛門(たかやまぜんえもん) | | 角田市 | | 8 |
| | 泉麟太郎(いずみりんたろう) | | 角田市 | | 9 |
| | 五十嵐汶水(いがらしぶんすい) | | 蔵王町 | | 10 |
| | 安藤太郎(あんどうたろう) | | 七ヶ宿町 | | 11 |
| | 高山開治郎(たかやまかいじろう) | | 大河原町 | | 12 |
| | 尾形安平(おがたあんぺい) | | 大河原町 | | 13 |
| | 大沼萬兵衛(おおぬまんぺい) | | 村田町 | | 14 |
| | 三宅義信(みやけよしのぶ) | | 村田町 | | 15 |
| | 大池唯雄(おおいけただお) | | 柴田町 | | 16 |
| | 飯淵七三郎(いひぶちしちさぶろう) | | 柴田町 | | 16 |
| | 太斉熊吉(ださいくまきち) | | 柴田町 | | 17 |
| | 阪田伝治(さかたでんじ) | | 柴田町 | | 17 |
| | 平間庄衛門(ひらましょうえもん) | | 柴田町 | | 17 |
| | 櫻井喜吉(さくらいききち) | | 柴田町 | | 17 |
| | 及川ます(おいかわます) | | 柴田町 | | 18 |
| | 大泉茂基(おおいずみしげもと) | | 柴田町 | | 18 |

| | | | |
|-----------------------------|-------|-----|----|
| 小室達(こむろとおる) | | 柴田町 | 19 |
| 支倉常長(はせくらつねなが) | | 川崎町 | 20 |
| 富田広重(とみたひろしげ) | | 川崎町 | 20 |
| 鈴木吉之丞(すずききちのじょう) | | 川崎町 | 21 |
| 丹野丹治(たんのたんじ) | | 川崎町 | 21 |
| 菅原栄一(すがわらえいいち) | | 川崎町 | 22 |
| 大沼千束(おおぬまちづか) | | 川崎町 | 22 |
| 二瓶博(にへいひろし) | | 丸森町 | 23 |
| 齋藤理助(さいとうりすけ) | | 丸森町 | 24 |
| 星泰三郎(ほしたいざぶろう) | | 丸森町 | 25 |
| 目黒平治(めぐろへいじ) | | 丸森町 | 26 |
| 鈴木正夫(すずきまさお) | | 丸森町 | 27 |
| 山並算右衛門美篤 (やまなみさんえもんよしあつ) | | 丸森町 | 28 |
| 佐藤清右衛門(さとうせいえもん) | | 丸森町 | 29 |
| 原田敬也(はらだけいや) | | 丸森町 | 30 |
| 谷津はつね(やつはつね) | | 丸森町 | 31 |
| 小野久進(おのきゅうしん) | | 丸森町 | 32 |
| 大槻文平(おおつきぶんぺい) | | 丸森町 | 33 |
| 加川茂平(かがわもへい) | | 丸森町 | 34 |
| 早川巳之助(はやかわみのすけ) | | 丸森町 | 35 |
| 早川みつい(はやかわみつい) | | 丸森町 | 35 |
| 佐藤清(さとうきよし) | | 丸森町 | 36 |

| | | |
|---|----------------------------|-------|
| 3 | 大河原教育事務所管内の偉人に関する自作視聴覚教材一覧 | 37-41 |
|---|----------------------------|-------|

| | | |
|---|------|----------|
| 4 | おわりに | 大河原教育事務所 |
|---|------|----------|

かたひら かんべい
片平 観平 (生没不詳)

【主な業績】蔵本大堰切通し工事（治水事業）

【業績の概要】

江戸時代中期の1780年代から1830年代にかけては、東北地方をしばしば大飢饉が襲い、多くの地域の農村で人々が餓えて死んだり、畑を耕すことをあきらめて村を逃げ出したりするなど農村の荒れ果てた様子は想像を絶するものでした。天明、天保の大飢饉が起きた時代です。

飢饉は白石でも例外ではなく、農村を救済するために多くの方策が取られました。その一つが片平観平が行った蔵本大堰切通し工事です。

文政（1818年～1830年）の頃の話です。蔵本村大堰は、河床の変化で少し水かさが増しただけで堰が壊れるほどもろくなっていました。堰が壊れるたびに地域の人が農作業のかたわらに復旧工事を行いました。工事はなかなか思いどおりに進まず、不便な生活を強いられていました。

特に、下流の分水路周辺では水不足の影響が深刻でした。生活の糧である農作物がうまく育たないどころか、火事になっても火を消す手立てがありません。堰が壊れるということは、下流の人々にとって生きるか死ぬかの問題だったのです。

観平はこんな状況を憂い、「この苦しみから何とか人々を助けられないものか」といつも思っていました。そして天保元年（1830年）、自ら陣頭に立って蔵本村大堰の大改修工事をするのを思い立ったのです。

さっそく観平は領主に届けを出しました。続いて私財を投じて人手を集め、息子の友英と一緒に工事に取りかかりました。工事では多くの困難が立ちはだかりましたが、どんなことがあってもやり通す強い意志で問題を解決していきました。

そして工事開始から実に10年の歳月が流れ、トンネル開通が間近に迫ったときでした。そのときの様子がこのようにいい伝えとして残されています。

通水する前の日は暴風雨で、観平は、工事が遅れてしまうことを心配しながらずぶぬれになって家に帰ってきたそうです。そして翌日の朝、工事が再開できるかどうか心配な観平が、取るものもとりあえず現場に行ってみると、何とまだつながっていないはずの切通しにとうとうと水が流れていたというのです。実は前夜の暴風雨のせいで勢いを増した水の流れがトンネルを貫通させたのでした。この光景を目の当たりにした観平は、しばらくぼんやりと水の流れる様子を見つめていたと言われています。

こうして自然の力も借り、俵縁から松ヶ淵までの岩壁を約250間（約450メートル）もの長さにわたって岩盤をくりぬいた観平の蔵本大堰切通しが完成し、豊かな実りを約束するめぐみの水が村々に運ばれてきたのです。切通しができてからは、水が豊かな土地に生まれ変わり、現在に至っています。

平成14年には、白石川河川敷に水の豊かな白石市の原点となる「片平観平隧道」が元のように復元され、切通し魚道観察テラスなど、水辺を中心とした「切通公園」も開園し、観平の行った偉業を後世に伝えるとともに市民の憩いの場になっています。

【資料提供：白石市教育委員会】

さとう こうぎょう 1850年 1922年
佐藤 孝郷 (嘉永3年～大正11年)

【主な業績】白石（札幌市）開拓のリーダー

【業績の概要】

佐藤孝郷は、嘉永3年（1850年）3月、仙台藩の支藩である白石藩の家老の子として宮城県刈田郡白石町に生まれました。仙台藩は戊辰戦争の際、奥羽列藩同盟に加盟して官軍に抵抗したため、領地を没収されました。白石藩も石高玄米55俵となり、無いに等しい状態まで減らされました。このため白石藩の家臣団7,459人は失業し、路頭に迷うこととなりました。領主の片倉小十郎邦憲は、北海道開拓を目指す意思を表明しましたが、ある者は地元にとどまって百姓となり、ある者は主君の長男片倉小十郎景範とともに、明治3年、現在の登別市幌別に移住しました。このとき家老の孝郷も加わって北海道の状況を調査し、翌年正月に帰郷しました。

開拓使は明治4年（1871年）白石藩片倉家の家臣600余人を北海道開拓使貫属の資格を与え、官費で移住する指令を発したため、孝郷の引率で今の札幌市白石に初めて開拓の鋤を下ろしました。一行は厳寒と食料不足に不安を駆り立てられましたが、孝郷は皆を慰めながら開拓使と交渉を続け、さらに開村への計画を説明するなど、息をつく暇もないような日々を過ごしました。



そんな中、孝郷は先年に幌別に渡った体験を基にして「北海道国名廃止建白書」を記して開拓使を驚かせました。入植当初、この地帯は[最月寒]と呼ばれていましたが、孝郷を中心に原野を開拓して道路を開き住居の建設に努めました。

同胞と一緒に荒れ地を開墾していた孝郷は、明治5年4月16日、開拓使から白石村貫属取締を命じられ、役人の道を進むこととなりました。明治6年に就いた札幌学校漢学助教授兼舎監を皮切りに、明治7年札幌町戸長兼白石・雁来両村戸長、明治8年札幌区初代戸長等を歴任しました。

役人となった孝郷は、若者の教育の重要性を認識し、最初の土地割り当てでは「善俗堂学問所」の用地を確保しました。この学問所は今の白石小学校の前身となっています。孝郷は貧しい児童には教科書や文房具を貸与していました。当初生徒は18人でしたが3年後には31人となりました。このため校舎が手狭になり、新たに校舎を建て[村学舎]と呼んでいました。明治14年（1881年）に公立白石学校となり、それが現在の白石小学校に至っています。

また、15人の若者が医学系への進学や農業修行への進出にも、取締戸長として支援しています。

佐藤孝郷は、明治初期の旧白石藩の窮地を救った一人であり、現在の札幌市白石区の礎を築いた人たちのリーダーであった偉大な人物であると言えます。

【資料提供：白石市教育委員会】

たまむし さだゆう 1823年 1869年
玉虫 左太夫 (文政6年～明治2年)

【主な業績】幕末から明治維新にかけて共和政治など近代国家建設を主張した開明の進歩人
【業績の概要】

時は明治維新、慶応4年(1868年)4月、薩長新政権に対抗し、仙台藩主伊達慶邦を盟主とした奥羽越列藩同盟が白石城で結成されました。白石城は奥羽を堅固する仙台藩要害の城であり、優れた人材が集まっていました。列藩同盟の建白書及び条文には、福沢諭吉が後に「学問のすすめ」で唱えた四民平等、上下一致、官民主義、議会制民主主義による共和政治の実現がすでに謳われており、当時の日本にとって最も進歩的な理想、理念が盛り込まれていました。この理念を起草した人物が玉虫左太夫です。



玉虫は、文政6年(1823年)仙台藩の中級武士の家に生まれ、3歳の時に父を失い、兄に育てられました。幼少から学問好きで、仙台藩校の養賢堂に入学し、蘭学者の大槻盤溪のもとで学ぶうちに外国事情に強い関心を持ち、いつの日か外国をこの目で見たいと思うようになりました。

弘化3年(1846年)24歳で江戸に出奔し、商家の下男として住み込み、夜はあんまを副業としながら必死になって勉強しました。ある日、湯島の昌平坂学問所塾頭の林復斎が、通りすがりに、難しい古詩を朗吟しながら草むしりをしている玉虫に興味を抱き話しかけました。その時の受け答えから、林復斎は玉虫の学識の深さに舌を巻き、それが玉虫登用のきっかけとなりました。玉虫は、天下の秀才が集う昌平坂学問所でめきめきと頭角を表し、塾長に推挙されることとなりました。この努力が仙台藩首脳目のとり、江戸で学ぶ仙台藩の青年たちの指導に当たることになったのです。その弟子の中には、将来、日銀総裁となった富田鉄之助や、内閣総理大臣となった高橋和喜治(是清)もいました。二人は玉虫の教えに感化され、後にアメリカに留学し、国際人として活躍しました。

玉虫は、湯島の学問所で塾長としての地位を得たものの、それだけで満足することができませんでした。小さい頃からの夢であった「外国をこの目で見たい」、そして「日本の進むべき道を考えたい」という志をかなえたいと強く思い、幕府外国方に志願し、安政4年(1857年)蝦夷地に渡り、蝦夷地の風俗習慣、衣食住などを詳しく調査しました。その努力が報われ、万延元年(1860年)37歳の時、日本で初めての海外公式訪問となる幕府の遣米使節団の一員に選ばれました。使節団の団員の多くは、海のかなたの異人の国など、行ったらもう二度と生きて帰れないと嘆いたといいますが、玉虫だけは自ら志願し、選ばれたことで驚喜しました。仙台藩主伊達慶邦は、玉虫のこの快挙に対し三十両を贈り、その門出を祝しました。仙台藩士が海外に雄飛するのは、実に支倉常長以来のことでした。一行が上船した船はポーハタン号というアメリカ海軍の軍艦でしたが、その護衛船が、勝海舟や福沢諭吉を乗せた、かの有名な咸臨丸です。ポーハタン号は、ハワイ、アメリカ、アフリカ喜望峰、香港を回り、地球を一周して横浜に着きましたが、その間の半年以上の長い航海の様子について、玉虫は得意の健筆をふるい、毎日欠かすことなく詳細に記録し、後日「航米日録」としてまとめました。これは福沢諭吉の「西洋事情」に劣らない貴重な歴史資料となっています。

帰国後、仙台藩校養賢堂指南役頭取となり、慶応4年(1868年)戊辰戦争の勃発とともに、薩長の新政府に対抗し、白石を拠点として奥羽越列藩による新しい共和制の政府を樹立し、諸外国に負けない新しい日本の枠組みを提唱しましたが、戊辰戦争に敗れたことで、翌年自ら切腹しました。

玉虫左太夫が当時東北の誰よりも早く世界を見聞し、進むべき日本の将来の在り方を模索して、理想社会を実現しようと努力した生き方は、実に波瀾万丈でありました。

【資料提供：白石市教育委員会】

よしの がじょう 1876年 1926年
吉野 臥城 (明治9年5月3日～大正15年4月27日)

【主な業績】『明治詩集』の編纂、『新體詩研究』及び小説『痛快』、『西行』等の著者
人物評論、『時勢と人物』、『党人と官僚』、『日本富豪の解剖』

【業績の概要】

西を仰げば臥牛の城址 思い出永久につきせぬところ…



吉野臥城詩碑 (台山公園)

角田小学校校歌の冒頭です。その臥牛城址 (台山公園) の一隅に、ある文人の詩碑があることを知る人はあまり多くはないでしょう。角田小学校の卒業生でもある吉野臥城を顕彰した詩碑であり、建立は昭和29年でした。それには本県出身の詩人白鳥省吾の揮毫により、次の文が刻まれています。

世界を何の色にも染めず 正義と自由の圈を亘がきて
愛の泉をつくることなく 平和の光にいろどらしめよ

臥城が反戦平和を願った「渾圓球上平和の曲」(『野茨集』所収)の終末4行です。

吉野臥城は、明治9年(1876年)5月に伊具郡角田町角田字南(現在の角田市角田字南町)の帰農士族吉野儀平、ふよ夫妻の長男として生まれました。

本名は甫(はじめ)です。20歳の頃から詩は臥城、短歌は甫、俳句は牛南、評論は鐵拳禪と、号を使い分け文筆活動を行っていましたが、一般には臥城の名で知られています。

臥城の文学的素養を開花させたのは、祖母の壽世だと言われています。「詩壇の回想」で臥城は、祖母について次のように書いています。

祖母は實に好い女性であった。文盲なもの多い時代の女性としては異數で、角文字や倭を書く術を知って居た。夜になると何時も昔唄を聞かされた。小倉百人一首は課業のやうに讀まされた。これは五歳か六歳の時であつて、意味は解らなかつたが、非常に面白いと思つて暗誦した。

吉野臥城は16歳から23歳までの8年間、角田小学校で授業生(代用教員=途中検定試験に合格訓導)として教壇に立ちました。この間、「逢隈会」という短歌会を開いたり、「女郎花」「幻影」などを詩壇に発表したりするなど盛んに文筆活動を行いました。また、その功績が認められ「河北歌壇」の選者にも委嘱されています。

明治33年(1900年)、24歳の臥城は活動の場を仙台に求め、立町小学校に転任しました。角田を離れるときに残したのが「決別の歌」でした。

決別の歌

今故郷を去らんとす かへり見れば臥牛城
影は消えゆく風の外 僅かに招く氏神の
根は長し杉のうれ (第1連)



『明治詩集』(昭文堂刊)
(仙台文学館蔵)



臥城と花子
(角田市郷土館蔵)

仙台での臥城は同僚の亀田花子と結婚し、意欲的に文筆活動を行いました。短歌会「新韻会」を開き、歌集「新韻集」(上・中・下)に880首を収めました。また、この頃、内村鑑三の思想に触れ、大きく影響を受けることになります。「文学界」「中央公論」等の雑誌にも投稿し、臥城の名は高まっていきました。

中央での文筆活動に意欲を燃やした臥城は、明治39年(1906年)教職を辞し角田に戻りました。翌年には意を決し、単身上京します。この時期で特筆されるのは『明治詩集』『新體詩研究』の編輯です。これは島崎藤村や河井醉茗ら当代一流の詩人の自薦詩を臥城の要請で集め解説を加えたもので、世の注目を集めました。また、この頃より、臥城の文筆活動は小説や人物評論にも広がっていきました。

臥城の東京での单身生活は15年に及びました。その間、角田小学校の教員をしながら物心両面で彼を支え続けたのが妻の花子でした。妻の存在がなければ、文人吉野臥城が世に出ることはなかったかも知れません。大正15年(1926年)4月27日、51歳で臥城は没しました。二人は今、長泉寺(角田市)に眠っています。

【資料提供：角田市立角田小学校】

もうり まんのすけ
毛利 萬之助

1869年 1948年
(明治2年5月10日～昭和23年12月30日)

【主な業績】私財を投じて大型揚水機を設置，枝野村を干害から救った人物

【業績の概要】

今から150年ほど前のことです。阿武隈川の東側の枝野村の人々は田んぼの水が足りずに困っていました。干害といって、水が足りないために稲が枯れてしまうことがたびたび起こったのです。当時、枝野村の田んぼは、隣の藤尾村の内町ため池から水を引いていました。しかし、雨が降らないと、そのため池は、たちまち干上がってしまい、田んぼに水が引けなくなってしまうのでした。枝野村の西側には阿武隈川が流れていましたが、阿武隈川は枝野村よりだいぶ低いところを流れているために、水を引くことはできませんでした。

毛利萬之助は毛利庄兵衛の長男として明治2年（1869年）に生まれました。庄兵衛は教育熱心な人でしたが、萬之助は長男だったので、上の学校には進まず、父のあとを継いで米づくりや蚕のたねを作る農家の仕事をしました。

萬之助は、水不足に困る枝野村の人々を見て、阿武隈川の水を村に引いてくることはできないかと考えました。明治20年（1887年）、萬之助が18歳の時に、自分で揚水機を作ろうと決心し、作り始めましたが、うまく水をくみ上げることはできませんでした。萬之助は35歳のときに再び揚水機を作る研究に取り組みましたが、このときもうまくいきませんでした。

大正8年（1919年）、枝野村を大干ばつがおそいました。枝野の田んぼは水が足りなくなり、せっかく育った稲は、ほとんどが枯れてしまいました。萬之助は前に東京の博覧会で見たドイツ製の大型揚水機を思い出し、国や県にお金を補助してもらえるように働きかけましたが、うまくいきませんでした。そこで、自分の家の財産を使うことを決意します。当時のお金で13,000円（現在の5千万円から1億円と考えられる）です。家族や萬之助の兄弟たちは、こんなにお金を使ったら、毛利家はつぶれてしまうと萬之助の決意に大反対しました。しかし、枝野村の人々を助けたいという萬之助の決意は変わることはありませんでした。

大正9年（1920年）、萬之助は揚水機を買い、阿武隈川の土手に取り付ける工事を始めました。1年ほどかかって、揚水機は完成し、阿武隈川の水をくみ上げることに成功しました。くみ上げた水が用水路に流れるのを見た村中の人々は、大喜びしました。枝野村の約半分の田んぼが、この揚水機でくみ上げた水で米づくりができるようになりました。

萬之助の揚水機のおかげで水に困らなくなった枝野村の人たちは、それまで水がなくて荒地のままだった土地や桑畑を田んぼに変えたり、新しく水を引くための用水路をつくる工事を村中で行ったりしました。何年もかけて、90町歩の田んぼが完成し、枝野村の人々のくらしは以前より豊かになりました。

萬之助は揚水機を買った上に、自分の財産を使って3年間も動かし続けたために、貧しくなっていき、とうとうお金がなくなってしまいました。1923年（大正12年）、揚水機は枝野村に引き渡され、村で動かすことになりました。萬之助がお金に困っているときには、萬之助の兄弟たちや萬之助の子どもたちがお金を出して守りました。また、村の人々も助けてくれました。

昭和23年（1948年）、萬之助は伊具郡地方事務所から表彰されました。そして、その年、萬之助は80歳の生涯を閉じました。自分のことよりも、いつも周りの人たちのことを考え、行動した一生でした。

【資料提供：角田市立枝野小学校】

あらい ぐいち
荒井 悟一

1899年 1980年
(明治32年3月9日～昭和55年3月18日)

【主な業績】養蚕技術開発

【業績の概要】

伊具地方は古くから養蚕が盛んな地域であり、藤尾地区も養蚕を営む農家が多くありました。また、この地域は阿武隈川の洪水で農作物の被害に見舞われることも多々あり、川沿いの農地を桑畑にしておけば最小限の被害で済むことも、この地方に養蚕農家が多かった理由でした。

荒井家はもともと養蚕を家業にしておらず、農家でもありませんでした。ただ、悟一自身は、当時の花形産業である繊維産業に興味をもち、伊具農蚕学校を卒業して片倉製糸に入社しました。社員として宮城県内の会社施設に勤務し、県内各地で養蚕農家が苦しんでいる現実をつぶさに見てきました。あまりにも悲惨な状況を目の当たりにして、悟一は会社を辞め、養蚕農家のために技術開発に専念することにしました。

その一つは蚕の伝染病「違蚕（いさん）」予防です。違蚕は一度に多くの幼虫が死んでしまう伝染病で、第5齢虫になるまで発病しないまま成長を続け、出荷直前まで伝染に気付かないことも少なくありませんでした。これから繭になろうとする直前に死ぬのです。ですから手の施しようがありませんでした。せっかく手間暇掛けて一ヶ月ほども育ててきたのに、一番大切な時期に死んでしまうことは、養蚕農家にとって大きな痛手でした。違蚕により、多くの養蚕農家が経済的に厳しい状況に追い詰められている事実、悟一は心を痛め続けてきました。しかし、専門家の研究で次のことが明らかになってきました。違蚕は第1齢虫から第2齢虫の頃に伝染すること、幼虫を育てる場所の温度管理や衛生管理を徹底することで違蚕を予防できるということでした。そこで、養蚕農家一軒一軒が稚蚕（ちさん：ふ化したばかりの幼虫）を育てることで生じる違蚕を回避するために、共同で稚蚕を育てることになりました。養蚕農家を集落毎にまとめて、悟一が開発した技術を身に付けた専門の係が、24時間体制で管理する稚蚕共同飼育所を複数設営することにしました。昭和7年のことです。これにより、違蚕は圧倒的に減少し、養蚕農家は安定した繭の供給が可能になり、大きな喜びを得ることになりました。

もう一つは、桑の木から葉を一枚一枚手で取り、それを大量に蚕に与えなければならない時間と労力です。養蚕農家とはいえ、稲作も畑作もしなければならない家がほとんどで、農繁期には寝る間も惜しんで働かなければなりません。特に第5齢虫は、それまでと比較にならないほどの量を食べます。一枚ずつ桑の葉を手で取ってわらだ（わらや竹で作った格子様のもの、蚕箔とも）に敷き詰める作業は、農家にとって大きな負担でした。そこで悟一は、この作業を省力化するために、条桑育（じょうそういく：枝付きのまま桑を与えること）という技術を広めました。このことで、労力も時間も大幅に削減され、春蚕、秋蚕、晩秋蚕、の年3回の飼育に夏蚕も加わり、飼育量も大幅に増え、蚕の増産と収入の増加につながりました。これも、農家にとっては大きなゆとりを生むことになり、悟一には感謝の言葉が絶えませんでした。教を請う養蚕農家が悟一のもとに集まり、この方法は仙南全域に広まっていきました。

これらの功績により昭和26年には宮城県知事より表彰、昭和31年には国より黄綬褒章も受けています。養蚕農家のために仕事を辞め、養蚕技術開発に寝食を惜しんで生涯を捧げた荒井悟一翁。地域の人々はその遺徳をしのび、「蚕神」と刻んだ石碑を悟一翁の庭に建立しました。

資料提供：角田市立藤尾小学校】



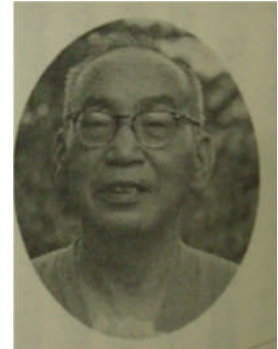
さとう はしめ
佐藤 基

1894年 1968年
(明治27年2月17日～昭和43年4月17日)

【主な業績】 医学博士，インシュリンの発見者の一人

【業績の概要】

基は伊具郡東根村坂津田の出身です。明治45年3月，旧制角田中学校を優秀な成績で卒業後，同年4月，旧制第二高等学校二部に入学し，医学の道を志しました。大正4年4月，東北帝国大学医学部に入学しました。当時，東根村では，村出身者が大学に入学したということで大きな話題になったということです。



大正8年7月，同大学卒業後，東北帝国大学医学部助手として熊谷内科(現在の第一内科)に勤務することとなりました。研究熱心な基は，医療に従事する傍ら，熊谷岱蔵先生と共に専門分野の研究に没頭し，遂に大正10年，世界で最初にインシュリン(脊椎動物の膵臓のランゲルハンス島から分泌されるホルモン，糖尿病の治療薬として有名)を発見しました。その後，報告手続きに時間を要したために，アメリカのバンチングとベストが最初の発見者と記録され，基はノーベル賞を逸してしまいましたが，これによって基は医学界でも大いに注目されるようになりました。

大正13年9月，基は日本赤十字社宮城支部仙台診療所の所長となり，昭和4年11月には，インシュリンに関する研究や医師としての手腕・業績が高く評価され，念願の医学博士号を取得しました。

昭和18年1月，仙台赤十字病院の院長となり，混沌とした戦時期を不屈の精神で乗り切り，終戦間もなく，仙台市五橋に近代的な設備を整えた病院舎を新築しました。この間，庶民的で飾らない博士の人柄は，病院の職員や患者はもちろん，他の関係者の信頼を集め，まさに日赤仙台病院育ての親とも言うべき功労者でした。

昭和33年11月，請われて仙台赤十字病院名誉院長となった後も，実直で庶民的な博士は，患者の要請に，都合のつく限り気楽に応じていました。東根でも，急病や難病に苦しむ患者のために，仙台から車を飛ばして往診し，的確な診断と処置を施したということでした。

晩年は，仙台市弓ノ町で，子や孫に囲まれ，安らいだ生活を過ごしました。昭和43年4月，勲四等旭日小綬章を授与されました。

参考資料：角田市東根公民館編集「東根の郷土史～ふるさとの地名・人名」

【資料提供：角田市立東根小学校】

たかやま ぜんえもん
高山 善右衛門

1863年 1928年
(文久3年～昭和3年)

【主な業績】角田用水の開発

【業績の概要】

角田市は阿武隈川が市の中央を貫き、西南部には水田地帯が広がる宮城県南有数の米どころです。しかし、百年ほど前までこの辺りの農民は大雨になると阿武隈川の洪水に苦しめられ、雨が降らなければたちまち水不足になり困っていたのです。また、飲み水も不足する地域で干害も多く、矛盾する水の問題に悩まされ続けました。

高山善右衛門は明治維新の5年前、1863年に角田町の裕福な商家に生まれました。そして、27歳で町議会議員になり、翌年県議会議員になりました。

しかし、その頃の角田は依然として水害と日照りに悩まされ続けました。藩政時代に造られた「舟沼」「赤沼」「大沼」など7つのかんがい用ため池は、水深がわずか2メートル足らずで、田植えの水にも不自由する有り様でした。そのため、農民同士の水争いが絶えませんでした。

そこで、善右衛門は父三七郎が試みたが立ち消えになっていた角田上水計画を再び行うことを決意しました。「私財を投じて」という強い意志と信念で、善右衛門は自分のお金で測量を行い、工事遂行に着手しました。翌年には仲間へ声をかけて同盟会を組織し、銀行から事業費4万5千円を借り入れて着工に踏み切りました。

善右衛門が工事を始めた明治39年は、夏になっても気温が上がらず、長雨が続くという天候で大凶作でした。そのため、平年の10分の1しか米がとれませんでした。善右衛門は自宅で7日間、5百食分のかゆを農民に振る舞って工事を進めたそうです。工事監督を務めた善右衛門は、弁当持参で毎日工事現場に足を運びました。工事期間の途中で、請負業者が工事費の増額を求めて工事を中止するというアクシデントもありましたが、善右衛門は予算を追加して乗り切りました。



そして、わずか1年足らずで全長6.1キロメートルの水路が開削され、阿武隈川の水が角田の1,500町歩（ヘクタール）の水田を潤しました。その時の農民の喜びは大変なものでした。さらに善右衛門は「大沼」「赤沼」「舟沼」など6カ所の沼を干拓し、150町歩（ヘクタール）の良田に生まれ変わらせました。

角田用水が完成した頃、角田の人はまだ飲み水に困っていたので、町の人たちはこの水で顔や米を洗いました。そして、大変ありがたく思いながらこの用水を「角田上水」と呼びました。後に、善右衛門は町から工事の指導者を称える意味の「上水翁」という名前を贈られました。また、政府は銀杯を贈りその功労を労いました。善右衛門は昭和3年に65年の生涯を閉じましたが、その葬儀は町で行われ、大勢の人たちが悲しんだと言われています。

昭和5年、高山善右衛門の業績をいつまでも忘れずに称えようと銅像を建立しました。その銅像は現在、江尻配水ポンプ展示館にあります。善右衛門の強い意志と信念で造られた角田用水は、今でも私たちの生活を支えています。

【資料提供：角田市立横倉小学校】

いずみ りんたろう 1842年 1929年
泉 麟太郎 (天保13年～昭和4年)

【主な業績】北海道開拓

【業績の概要】

戊申戦争後、角田を含む仙台藩は「朝敵」とされ、大変つらい思いをさせられました。「刀を捨てて百姓になれ」。これが新政府の東北諸藩に対する処分であり、それまでの殿様の禄高は、ほとんど召上げられたのです。角田の石川家の家臣団も、これから殿様を守り、どのように生きていくかの決断を迫られていました。

そのようなとき、政府は北海道の開拓を推進するため、開拓使を設置し、蝦夷地を北海道と改め、願い出があれば、誰にでも土地を与え、北海道の開拓にあたることを認めました。石川家中にとって、このまま角田の地にいる限り、新しい領主の支配に服さなければなりません。だからこそ、石川家の家臣団は、いかなる困難が待ち受けようとも、新天地に希望を求め、北海道移住を決意したのです。このようにして、宮城県内の多くの士族が明治3年から4年にかけて、北海道に移住していきました。

泉麟太郎は、角田が誇るこの時代の偉大な人物です。麟太郎は角田の添田家に生まれ、戊申戦争後、北海道室蘭に武士集団として移住しました。麟太郎28歳のことです。明治3年4月に室蘭に到着しましたが、移住にかかる政府からの補助や給与、開拓費の貸付などはありませんでした。そのため、麟太郎は生活が困窮し、若い人を連れて道路の土木工事に行ってお金を稼ぎました。また、兄の添田龍吉と塩や氷、そして網をつくるなどして移住者たちの生活を支え、本当につらい年月を過ごしたようです。そのような真剣な姿が認められ、明治17年には室蘭郡の警察署長にもなりました。

しかし、室蘭の土地は狭く、多くの移住者の開拓地を確保できないという新たな課題がありました。そのため、室蘭郡長古川浩平の「夕張郡は肥沃な土地である」との言葉から、アノロへの移住を計画します。明治21年に泉麟太郎は有志7戸、24人を率いてアノロへ移住しました。開拓の2年後には角田村が設置され、さらに、稲の試作にも成功し、夕張川から水を引いて稲作を振興し、角田村の基礎をつくりました。これが現在の栗山町です。その後、麟太郎は村長、道議会議員を歴任し、昭和4年88歳で亡くなりました。

角田村において麟太郎を支援した人物が3人います。3人とも戊辰戦争の時に戦った薩摩藩の出身です。3人は麟太郎から土地を購入するなどして、資金面で支援し励まし続けました。では、なぜ、敵として戦った薩摩藩士たちが、負けた側である角田藩士を支援するようになったのでしょうか。おそらく、彼らは、麟太郎や角田から移住した人たちの武士としての誇りと、角田を誇りに思いながら私利私欲ではなく、自分たちの未来に向けた社会づくりをするという「志」に心を打たれたのだと思います。

【資料提供：角田市立角田中学校】

いがらし ぶんすい 1822年 1891年
五十嵐 汶水 (文政5年～明治24年)

【主な業績】庶民への産科医学の普及と産婆の養成・弥陀の杉の保存

【業績の概要】

平沢地区は江戸時代、伊達家の要害として大きな役割を果たしました。五十嵐汶水は、平沢領主高野家の家臣、五十嵐英允の次男として生まれました。しかし、汶水が10才から15才にかけて相次いで不幸が訪れます。10才で祖父死去、14才で祖母が死去、15才では両親を亡くします。身寄りがなくなった汶水を親戚が面倒をみることになりました。当時は天保年間であり、全国各地で飢饉も起きていました。平沢の小村崎では人口が699人から352人に減ったという記録も残っています。汶水は、身寄りがなくこの現状を目の当たりにして、よほどショックだったらしく気の病になり、それがなかなか治らず家出を繰り返したという記録が残されています。その結果、19才の時に高野家から暇を得て、姉を頼って亙理に移り住みます。その後、一念発起して医者を目指し、様々な困難を乗り越えて賀川流の産科医学を学んだ後、再び高野家に戻ります。この時、汶水は高野家の侍医としての役目を果たすことになりました。

汶水は、その後、伊達家に嫁いだ高野家の姫君が難産した際に、無事に出産させた功により、仙台城下に医院の開業を許されました。仙台に開業してからも平沢への思いは失せることなく、「だるま堂」にある「弥陀の杉」を保存するために、石碑を建てるなど尽力する様子が記録に残されています。

同時に、平沢において庶民への産科医学の知識普及にも力を尽くします。汶水の教えは、当時最新だった西洋医学知識を広く取り入れるとともに、人命尊重の大切さを説くものでした。また、産婆の養成にも力を入れ、何人もの産婆を輩出しました。

「だるま堂」は、慶応3年(1867年)に汶水が建てた安産祈願所です。汶水は、庶民に馴染みのない医学を広め、命の尊さを教えるきっかけ作りとして、当時の庶民が行っていた「神頼み」をも積極的に取り入れようと、「だるま堂」を建立しました。汶水の思いは広く受け入れられ、北は仙台、南は福島・相馬地方まで、各地で「だるま堂」への参拝を行う女人講「だるま講」が結成されました。

当初は汶水の教えを伝習するよりどころであった「だるま講」も、やがて純粋な安産祈願の民間信仰へと変化しつつ流行を続けました。昭和30年代半ばまでは、「だるま堂」の祭日には各地の講から代表者が集まり、出店や見せ物小屋などが立つほどの縁日として、大いににぎわったと伝えられています。

汶水は、明治24年(1891年)に仙台で亡くなっていますが、お墓は「弥陀の杉」の後にあるこんもりとした盛土となって残っています。これは、「だるま塚」と呼ばれ、石室に盛土をした塚で、臨月の女性のお腹をかたどったものと伝えられています。また、石室の中には汶水の石像が安置されています。

庶民のために、身に付けた貴重な知識と技を惜しみなく伝えようとした五十嵐汶水は、蔵王町平沢地区が誇る郷土の偉人です。

【資料提供：蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係】

あんど う たろう
安藤 太郎

1910年 2010年
(明治43年1月3日～平成22年5月9日)

【主な業績】実業家

【業績の概要】

安藤太郎は、七ヶ宿町（当時は七ヶ宿村）滑津で生まれ、父源治郎が子弟教育のため仙台に住まわせ、宮城県師範附属小学校、仙台第二中学校に学びました。その後旧制水戸高校を経て東京大学を卒業しました。

小さい頃から非常に負けず嫌いで、自分が正しいと思うことに対しては意志を通して取り組み、性格は豪放で小さいことにとらわれない率直な物言いをする人でした。

東大卒業後は、住友銀行に入行して40年間勤務し、個性を生かした働きで、副頭取まで昇進しました。昭和49年には住友不動産社長に転出しました。当時は「オイルショック」の始まりで、物価が高騰して全国の地価が高騰したのが一挙に暴落し、不動産業界が苦境に陥った矢先の社長就任でした。

このころから、太郎の人生観・価値観が大きく変わり、「仕事をするのには人の心をつかまなければ出来ない。己を無にして人を信頼し、また人から信頼されなければ仕事はできない。」と従来の強気一点張りの姿は消え、会社の再建に一生懸命努力し、成功を成し遂げ会長まで務めました。

晩年は、穏やかな人柄となり、100歳まで長生きをしましたが、長生きの秘訣は、一に健康、二に一握りの経済的豊かさ、三に感謝の念の「三K」と言っていました。

また、これまでの業績が認められて、平成2年には勲一等瑞宝章を受賞しました。

【資料提供：七ヶ宿町教育委員会】

たかやま かいじろう
高山 開治郎

1876年 1942年
(明治9年4月22日～昭和17年5月25日)

【主な業績】白石川桜並木「一目千本桜」となる桜苗木1,200本を寄付

【業績の概要】

春、大河原町の白石川土手に咲き誇る一目千本桜は、今や全国にその名を知られる桜の名所です。そのきっかけをつくったのが、明治9年4月22日、大河原村86番地（現在は字町189番地）に高山庄吉の長男として生まれた「高山開治郎」です。高山家が代々営む高山屋は、参勤交代の諸大名の御休屋ともなる大河原の旅籠で、明治9年と14年に明治天皇が東北御巡幸の折、御昼食所となっています。高山屋は明治24年に父が亡くなり旅館を廃業したことで、開治郎は（丁稚奉公のため）上京しました。その後苦学の末、優れた才能を発揮して中央経済界で活躍し、東京商機新聞社長となりました。

大正12年4月、「故郷のためになる何かをしたい」という郷土愛と、「東京にある桜の名所の見事な眺めと花見の楽しみを故郷にもたらしたい」という気持ちから、大正12年に700本、昭和2年に500本の桜の苗木が大河原町に寄贈され、改修工事が終わったばかりの白石川の堤防に植えられました。ソメイヨシノは樹齢が短く、当時植えられた桜は、今は300本ほど残っていますが、枯れた後には若い苗木が補植され、桜並木は守られてきました。

高山開治郎の故郷を愛する心は、現代に受け継がれ、新しく桜を植える人たちや、病気から桜の木を守ろうとする人たち、そして桜を愛する多くの人たちの心に美しい花を咲かせています。



【資料提供：大河原町教育委員会】

おがた あんぺい
尾形 安平 (天保年間～明治^{1897年}30年6月17日)

【主な業績】尾形橋の架設，東北本線敷設の実現に尽力，大河原駅の誘致，六沼干拓などの事業による大河原町発展の基礎作りに尽力

【業績の概要】

大河原町を東西に分ける白石川に架かる尾形橋，また，JR大河原駅前の尾形丁の名前の由来となる人物が，初代尾形安平です。江戸時代末期天保年間に大河原村本町の高山家に生まれ，名前を十代之助（とよのすけ）と言ひ，代々酒造業を営む尾形家の養子となつてからは初代安平を名乗りました。常に人と争わず，公共奉仕の考えを強く持つ人で，明治11年，白石川に仮橋が架かったことを契機に，町を発展させるため，それまで畑が広がっていた大谷村に道路や宅地の造成を行つて，積極的に街づくりを促進しました。明治14年に日本鉄道株式会社が設立されると，安平は鉄道と駅を誘致するための巨額の資金を出資するとともに，明治16年4月に仮橋を撤去し，後に尾形橋と呼ばれる「開運橋」を架設しました。

明治22年12月15日に鉄道の大河原駅が開業すると，駅前に広がる尾形丁は汽車からの乗降客でにぎわひ，運送屋，旅館，食堂などもできて町の表玄関として栄えました。当時，仙台までの駅は白石，大河原，岩沼だけで，列車も一日二往復という時代でした。ちょうどこの頃，明治22年4月に大河原村，大谷村などが合併し，大河原町が誕生するに至りました。

また，明治22年から25年にかけて，大河原町大谷から船岡村に至る広大な土地に灌漑を施し，新田を開発する六沼干拓という事業も尾形安平が行つた大事業です。

尾形丁，尾形橋という名前が現在も残っていることは，強い志を持ち，人々と社会のために献身的に力を尽くした先人の偉業を讃えてのことと言えるでしょう。

【資料提供：大河原町教育委員会】

おおぬま まんべい 1874年 1937年
大沼 萬兵衛 (明治7年～昭和12年)

【主な業績】 澄川用水の完成

【業績の概要】

村田町内には澄川用水が流れています。大正時代、この地域の人々は、毎年のように干害に悩まされていました。この用水は、大沼萬兵衛氏を中心とした多くの人々の努力と苦心の末、昭和時代の初期に完成したものです。

大沼萬兵衛氏は、大正12年8月から昭和8年1月まで村田町の町長を務めました。これまでに村田町を幾度となく襲っていた日照りの害を克服しようと、大正14年、円田村長と沼辺村長とが協力をし、澄川から水を引くことがよいとすする対策を基に、大正15年から、黒沢尻用水の組合との話合いを経て、澄川用水の計画が作成されました。また、国や県に建設予算の請願をし、昭和2年に澄川用水工事の調査を行ったことによって、昭和3年に国からの工事許可を取り付け、昭和4年3月から総工費46万円（現在のお金で約15億円）以上の資金を工面することができました。村田町、沼辺村、円田村の多くの農民たちは、農繁期以外を利用して853日の用水工事に従事した末、悲願であった澄川用水の完成に至りました。

町の人々は、町内を流れる松尾川を「からん川」と呼んだり「あら川」と呼んだりしていました。川の水が枯れたり、大雨で荒れ狂ったりして洪水を起こしたりしたからです。この澄川用水の完成によって、村田、小泉、沼辺地域（耕作面積1250ヘクタールにおよぶ）の多くの田が水を供給され、毎年、天候に関わりなく豊かな収穫を得ることができるようになりました。

澄川用水が完成した昭和6年、相山浄水場に当時の人々の苦悩や用水完成の喜びを記した石碑が建てられました。また、昭和12年には大沼萬兵衛氏の功績を讃え、銅像が建立されましたが、戦時中、金属回収のために撤去され、11年もの間、空しきものとなっていました。現在のものは、昭和30年に水道創設30周年を記念し、町民から寄せられた32万円以上の浄財をもって再建されたものです。



【資料作成：村田町立村田小学校】

みやけ よしのぶ 1939年
三宅 義信 (昭和14年11月24日～現在)

【主な業績】オリンピック2大会優勝

【業績の概要】

三宅義信は、1939年(昭和14年)村田町沼辺に7人兄弟の5番目として生まれました。家は大変貧しく、一家が暮らしていたのは父の実家近くの納屋でした。

食べ物もジャガイモや大根の葉が主で、米を食べることなどほとんどできないほどでした。

沼辺小学校(現在の村田第二小学校)、沼辺中学校(現在の村田第二中学校)で過ごした、少年時代、遊びたい盛りの義信でしたが、弟の子守や薪拾いなどの手伝いに加えて家計を助けるためのアルバイトもしなければならず、友達と遊んだりクラブ活動に参加したりすることはできませんでした。

中学校を卒業後、大河原高等学校(現在の大河原商業高等学校)へ進学してからも、相変わらずのアルバイト生活で、クラブ活動を行うことはやはりできませんでした。

しかし、高校2年の夏、義信の運命を変える出会いが訪れました。

近所の先輩に誘われて見学した柴田農林高等学校重量挙部。義信は、そこで初めて重量挙げというスポーツに出会ったのです。

当時の監督に自分から声をかけ、初めて重量挙げを体験させてもらってから、ときどき重量挙部を訪れるようになった義信は、次第に毎日欠かさず練習に通うようになり、めきめきと頭角を現し始めました。

高校総体で優勝し、その後、より高いレベルを求めて、法政大学に入学しました。

一時スランプも経験しましたが、徐々に記録が伸び始め、大学3年(1960年)のとき、第17回オリンピックローマ大会に出場し、第2位の栄冠に輝くこととなりました。

大学を卒業すると、さらによりよい練習環境を求めて自衛隊に入隊し、1964年に行われた第18回オリンピック東京大会では世界新記録で優勝し、念願の金メダルを手にするるとともに多くの国民に夢と感動を与えました。

さらに、1968年の第19回オリンピックメキシコ大会では、2連覇を達成し、第3位となった弟の義行とともに表彰台に上って、大きな話題となりました。

3連覇をめざして出場した1972年第20回オリンピックミュンヘン大会では、惜しくも第4位でしたが、この間、オリンピックを含めた世界大会7連覇を成し遂げ、世界記録を計27回更新しています。

現役引退後は、「俺がやらずに誰がやる、今やらずついていつできる」の言葉をモットーに、若手選手の育成に力を尽くし、指導者としての道を歩んでいます。

子どもの頃は、貧しいことをからかわれ、けんかをすることもたびたびあった義信でしたが、自分の夢と信念をもち、最後まであきらめずに努力し続ける姿勢を貫いたからこそ、このような偉業を成し遂げることができたのです。



【資料提供：村田町立村田第二小学校】

おおいけ ただお 1908年 1970年
大池 唯雄 (明治41年10月30日 ~ 昭和45年5月27日)

【主な業績】直木賞受賞

【業績の概要】

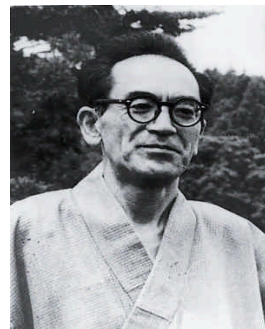
大池唯雄は、明治41年に船岡村に生まれました。小さな頃は、病気がちで学校を休むことが多かったのですが、旧制中学校で作文の才能が認められました。その後、作家で身を立てようと大学を中退し、大学の図書館に通って研鑽に努めました。

努力が実って昭和13年には、小説家であれば誰もが目指す「直木賞」を受賞しました。受賞対象となった作品は、幕末の戊辰戦争に参加した柴田家三兄弟を中心とした「秋田口の兄弟」と伊達政宗の二本松での戦いを扱った「兜首」でした。いずれも地域の歴史から題材をとった作品です。

大池の作品には、短編32作品、長編5作品などがありますが、常に「売れる作品より残る作品を」と心掛け、十分に調べ上げられたものばかりでした。

「私は、泣きながら歴史を書く。また、泣きながら書かれた歴史でなければ、読もうとも思わない。」と身近な人に話していましたが、大池のこの思いは、どの作品にもよく表れています。

直木賞受賞後も大池は柴田町に住み、槻木公民館長や柴田町公民館長を長く務めました。また、船岡中学校の校歌を作詞したり、船岡公園に「樅の木は残った」の文学碑を建てる努力をしたりするなど、柴田地方の文化発展のために力を尽くしました。 【資料提供：柴田小学校】



大池唯雄の主な作品

- 「オランダ楽兵隊」 ○「海国戦記」
- 「炎のかぎり」 ○「この空の下で」
- 「炎の時代」 ○「続・炎の時代」

いしぶち しちさぶろう 1846年 1926年
飯淵 七三郎 (弘化3年9月20日 ~ 大正15年)

【主な業績】明治・大正時代の農村改造及び宮城県の経済界、教育界発展への貢献

【業績の概要】

七三郎は農村の人々の指導啓発に力をつくし、明治25年に「船岡村農会」を作りました。具体的な事業としては、国や他県から農業技術者を招き、農家の仕事や生活の改善を指導したり、農産物の品種改良の技術を学ぶ機会を設けたりしました。また、農家に対して資金の融資をしたり、肥料の購入の指導をしたりもしました。これらの多大な功績から「船岡村の慈悲」と呼ばれるようになりました。また、公共事業には、私財の提供を惜しまず、道路改修や橋の架け替え等を行って、地方開発にも力を尽くしました。

その後、県会議員や貴族院議員を歴任し、宮城商業銀行や宮城農工銀行を創立し、宮城県の経済界の発展に貢献しました。また、独力で「日進学舎」を創立し、宮城県第二高等学校の基盤を作るなど、教育界にも尽力しました。

七三郎は謡曲を趣味に持ち、農閑時には村の青年たちに謡曲を教え、祭りなどで村民に披露しました。そのことが、船岡村の農民にとっての楽しみの一つになっていました。

現在、船岡城祉公園に七三郎の業績を讃える石碑があります

【資料提供：東船岡小学校】

ださいくまきち

太斉熊吉（生没年不詳）

さかたでんじ

坂田伝治（生没年不詳）

ひらましようもん

平間庄衛門（生没年不詳）

【主な業績】日本で初めての日食観測

【業績の概要】

明治20年8月19日、新潟県から茨城県にかけて日本の本州を横断する皆既日食がありました。この皆既日食は世界からも注目され、アメリカの日食観測の世界的権威であるドット博士が福島県の小峰城跡で観測を行ったほどでした。このたぐいまれな機会に、明治政府は、国の威信をかけてこの日食を観測する方針を打ち出しました。内務大臣山県有朋の号令のもと、「日蝕観測心得書」が発表され、専門家はもちろん一般の有志に至るまで観測が呼びかけられました。

皆既日食が見える地域から全国で70グループほどの応募がありました。その中で、部分日食の地域から応募したのは、宮城県の小学校教員と一般人からなる観測グループただ1グループだけでした。

観測者は太斉熊吉（入間田小学校：現在の柴田小学校）、坂田伝治（同）、平間庄衛門の3名で、彼らは「日蝕観測心得書」を忠実に実践するために、事前の打ち合せ・予行演習・準備・役割分担を行い、積極的に観測に取り組みました。彼らの観測記録を見た当時日本の権威者であった斉藤国治氏は、「日食の度合は0.995%ぐらいだからコロナが見えなかったのは当然」「りっぱな一等資料です」と評価しています。この観測記録報告書は、現在も東京天文台に大切に保管されています。

【資料提供：東船岡小学校】

さくらい

櫻井

ききち

喜吉

1862年

（文久2年4月～大正5年12月）

1916年

【主な業績】疫病（コレラ・赤痢）の流行に苦しむ貧民の救済

【業績の概要】

仙南地区では明治28年にコレラが大流行し、明治32年には赤痢が蔓延しました。そのような状況のさなかにおいて医者となったのが櫻井喜吉でした。文久2年槻木村（現在の柴田町槻木）に生まれた喜吉は幼少から学業に優れ、薬師（現在の薬剤師）であった祖父などから医学を学びました。

その後、仙台医学校や東京済生学舎で学び、明治17年に医術開業免許状を取得した後に槻木で開業医となりました。診療場は自宅が主で、診療区域は柴田町の三名生地区、角田の西小坂、阿武隈川向かいの東根の鳩原や小山までの広範囲におよぶものでした。移動は主に人力車でしたが、場所によっては舟で川を渡ったり、徒歩で山を登ったりしなければならず、診療に向かう行程は大変なものでした。

その頃、槻木村に隣接する船迫村にも疫病が蔓延しましたが、この地区の住人は貧しい人が多く、治療費や薬代を払えないので、医者にかかることができずに沢山の人々が死んでいきました。喜吉はこのような現状を見て「なんとかしなければ」と思い、明治26年に地域の有力者の協力のもと船迫に日曜治療院を作りました。貧しい人からは治療費や薬代を取らず、ひたすら診療と村の衛生面の改善に尽くしました。そのお陰で船迫村の病人は激減し、衛生状態も良くなりました。そして、明治36年までの十年間、船迫の人々のために医療と私財を与え続けました。

その後、県会議員郡会議長など政治家として活躍した喜吉の石碑は旧大光院跡地に建立されています。

【資料提供：東船岡小学校】

おいかわ
及川 ます (生没年不詳)

【主な業績】数千人の赤ちゃんをとりあげた功績

【業績の概要】

明治維新以前のことで、当時人々は貧しく、妊婦は子どもを産む直前まで田畑で働くことを余儀なくされていたのに加え、栄養が足りなかったり産むときの処置が悪かったりして無事に子どもを産むことができないばかりか、母親の命さえ落としてしまうことの多い時代でした。赤ちゃんが生まれた後でも、お乳をやって元気に育てることは大変なことでした。

領主柴田家の家臣であった及川惣治の妻、及川ますは、夫の死後、そのような現状を見て少しでも人々の役に立ちたいと考えた末、産婆になることを決意しました。

産婆になったますは、やさしく母親達を励まし、産婆の仕事をしっかりやり遂げました。そのかいあって死産が減り、子どもが元気に育つようになりました。産婆になって四十年以上の間、どんなに忙しくても、どんなに遠くでも駆けつけてくれるますに対して、人々は心から感謝しました。ますが取り上げた赤ちゃんは実に数千人にも及んでいます。

ますの功績をたたえ、なんとかお礼の気持ちを表したいと、世話になった人々がお金を出し合っ
て「及川ます媪(おう)の産婆の碑」を建てたのは、明治33年11月17日のことです。現在、柴田町船岡の大光寺の山門前には巾1メートル、高さ2メートルほどの大きな碑が建ち、ますが人々を見守ってくれているような感じがします。

【資料提供:柴田小学校,大光寺】



おおいずみ しげもと 1913年 1960年
大泉 茂基 (大正2年6月11日~昭和35年1月22日)

【主な業績】抽象版画に新境地を開いた版画家、詩人

【業績の概要】

郷土の版画家で詩人として知られる大泉茂基は、郡内有数の富豪大泉宗七郎の長男として大正2年、船岡に生まれました。父・宗七郎が内村鑑三に師事した敬虔なクリスチャンだったので、茂基は幼い頃からその影響を受けて育ちました。

白石中学校から東北学院高等部に進んだ茂基でしたが、1年後には退学して大好きな版画の勉強を始めました。やがて詩の才能も発揮して、多くの人に認められるようになりました。

昭和24年には、我が子のための唯一の版画詩集「けやき」を出版し、昭和26年には、NHK仙台放送局の音楽番組「詩と音楽の時間」で朗読される詩の原稿を書く仕事も託されました。

茂基は昭和31年、43歳で大きな手術を受けましたが、その後は版画制作活動に没頭しました。前の年に制作した「詩人Kさん」「男の顔」などの作品には制作に向けた情熱と努力がよく感じ取れます。さらにその頃から抽象版画に取り組むようになり、「最後の日」や「けやき」は高い評価を得ました。昭和32年10月に個展を開き、ドビュッシーのノクチュルヌから発想を得た「L a N o c t u r n」や連作「夜」などの抽象版画において新境地を開きつつありました。しかし、病には勝てず、昭和35年に46歳の若さで亡くなりました。

現在、茂基の情熱あふれる作品の多くは宮城県美術館に所蔵され、今も多くの人に深い感銘を与えています。

【資料提供:柴田小学校】

こむろ とおる 1899年 1953年
小室 達 (明治32年8月10日～昭和28年6月18日)

【主な業績】 帝展（現在の日展）で多数の作品が入選した彫刻家

伊達政宗騎馬像作

【業績の概要】

仙台の青葉城址天主台には、伊達政宗の騎馬像があります。この騎馬像の原型を作ったのが、柴田町出身の彫刻家の小室達です。小室は、明治23年に柴田郡柴田町槻木の入間田地区に生まれました。大正8年に白石中学校（現在の白石高校）から東京美術学校（現在の東京芸術大学）に進学し、彫刻の勉強に力を注ぎました。「人が美しいと思う表現の方法」を真剣に悩んだり研究したりしながら彫刻を作り続けました。大正12年に研究科（現在の東京芸術大学大学院）に進み、そのころ製作した彫刻「構想」が帝展（現在の日展）で特選という評価を受け、一流の彫刻家として認められました。

昭和8年、宮城県青年団の依頼で伊達政宗の騎馬像を作ることになり、一世一代の大仕事として、政宗の人間性・骨格・愛用した馬などについて1年余り、丹念に調査・研究活動を行いました。騎馬像制作を依頼されて、3年の歳月をかけて、騎馬像を完成させました。高さ約3メートル、重さ約2トンの銅像は、トラクターで何日もかけ、慎重に東京から仙台まで運ばれました。そして、昭和10年5月23日伊達政宗の騎馬像が、仙台の青葉城址天主台に設置されました。

小室はその後、物を作る楽しさや芸術のすばらしさを子どもたちに知ってほしいという思いから、これまで制作した彫刻を柴田町などの学校や施設に寄付しました。小室達の思いは70年余りたった今でも、銅像を通して子どもたちを見守り続けているのです。

備考：教材センターに自作DVD教材が有ります。今年度の作品なのでこの資料の一覧には載っていません。



【資料提供：東船岡小学校】

はせくら つねなが
支倉 常長 (永禄4年^{1571年}～元和8年8月7日^{1622年})

【主な業績】慶長遣欧使節団長

【業績の概要】

常長は安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将で、伊達政宗の家臣でした。有能な常長は、伊達政宗から、遣欧使節として通商交渉にあたるよう命じられました。

1613年、日本人の手で初めて作り上げられた西洋式帆船「サンファン・パウティスタ号」に乗って、常長の外交使節団一行180余人がメキシコを目指して月の浦を出港しました。太平洋の大海原では、何度も死の危険にさらされるような嵐に遭いましたが、3ヶ月ほどかかってやっとアカプルコに到着しました。疲れていましたが、次はスペイン国王の許可を得るためにスペインに向かいました。日本としては、初めての大西洋横断成功となったのです。

スペインで常長は、多数の王侯貴族が居並ぶなかで洗礼を受けてキリスト教の信者になったり、スペイン国王と8ヶ月も堂々とした態度で話し合ったりしました。しかし、日本との貿易に反対する人もいて交渉は難航しました。それでも、常長はくじけずに、今度はローマへ向かいました。

常長は、1年余り粘り強く貿易の話し合いを進めましたが、努力のいかにもなく交渉は失敗でした。そのころの日本では、キリスト教が禁止されていたことが大きな理由だったのです。

1617年、がっかりしながら再び大西洋と太平洋を渡る船旅に出ました。嵐で座礁するなど様々な苦難を乗り越え、1620年、ついに日本に着きました。7年ぶりの日本の地でした。

支倉常長は使命を果たせませんでした。メキシコ、スペイン、ローマの国王や法王と会見しながら、日本の様子を知らせ、国と国との大きな交流を実現しようとしてきました。国際交流の先駆者として、歴史にその名を残したのです。墓所は川崎町支倉の円福寺。

【資料提供：川崎町立支倉小学校】

とみた ひろしげ
富田 広重 (明治21年10月16日^{1888年}～昭和40年3月12日^{1965年})

【主な業績】宮城県会議員と富岡村長

【業績の概要】

富岡村に生まれた広重は、早稲田大学を卒業後河北新報に入社しました。この間、社会の様々な面に触れ、学識を深め、慈愛に満ちた行動力を身に付けていきました。

宮城県の発展のために力を尽くそうと一念発起して選挙に立候補し、昭和2年9月に宮城県会議員に当選し、昭和10年まで二期8年間県政のために活躍しました。

県会議員を辞めた後は、自分の故郷の発展のために力を尽くそうと考えました。富岡村の村長として昭和22年より30年まで、郷土発展のため献身的に村治に力を尽くしました。そして、富岡村と川崎町との合併事業では、村人の考えをじっくり聞き、みんなの暮らしがよくなるように奔走し、昭和30年に町村合併にこぎつけることができたのです。

長い年月に渡る政界等における活動の根底にあったのは、故郷を愛する心、人々の生活が豊かなものとなるようにという人を愛する心でした。

【資料提供：川崎町立富岡中学校】

すずき 鈴木 きちのじょう 吉之丞 (明治23年2月18日~昭和40年10月8日)

【主な業績】青少年健全育成「吉之丞よい子の会」

【業績の概要】

山形県境の笹谷地区に生まれ育った吉之丞は、家の暮らしを支えるために、若いときから炭を焼く製炭業に従事しました。

クヌギやナラの木を切り、長さをそろえ、山の斜面にくいを刺して切りそろえた木を重ねていきます。数がまとまったら、炭焼き窯まで運んでいきました。とても力のいる作業ですが、この後がまた大変です。運んできた木を隙間無く並べ、いよいよ炭焼きです。火を入れたら一週間は寝ずの火の番です。苦勞して焼き上げた上質の炭は誇りでもありました。

忙しい製炭の中でも、製炭用具を工夫して作り、売り歩きました。

行商等でこつこつと蓄えた大事なお金です。そのお金の50万円を、昭和40年2月8日に吉之丞は川崎町の子どもたちのために役立てて欲しいと川崎町教育委員会に寄付をしたのです。未来の子どもたちがすこやかに育って欲しいという願いからでした。

川崎町では寄付金を銀行に貯金し、その利子で吉之丞の意志を受けて「吉之丞よい子の会」を創設しました。町内に在住する児童・生徒の善行を毎年褒め称え「吉之丞よい子の会」が表彰を行っています。

吉之丞の意志は今も受け継がれ、川崎町の子どもたちの励みになっています。

【資料提供：川崎町立川崎第二小学校】

たんの 丹野 たんじ 丹治 (明治32年12月18日~昭和42年6月17日)

【主な業績】「ケヤキ沢用水路」の開発

【業績の概要】

川崎町古関から野上にかけての地区は、昭和の初め頃まで荒れ地でした。人々は炭焼きをしてお金を得ていましたが、生活はとても苦しく、せめて家族が食べる米ぐらいは自分たちの手で作りたものだ、と考えていました。

こうした人々の願いを実現させようとしたのが、当時の村会議員だった丹野丹治でした。

村人を集めて、この広い荒れ地を水田にする計画を話し合いました。村人は大賛成です。丹治は国や県にも働きかけ、仕事を認めてもらうことに成功したのです。

水田をひらくためには、まず、用水路作りです。いろいろな方法を考えましたが、「ケヤキ沢」の下にトンネル式の用水路を築くことにしました。

機械の発達していない頃です。長いトンネルを作るのに土や砂を掘り出すのは大変でしたが4年の年月をかけて完成しました。しかし、台風や洪水で何度も堰が押し流され、その度に人々は堰を作り直したのです。

「ケヤキ沢用水路」の完成によって新しくひらかれた水田は当時50ヘクタールにもなり、村人の「米作り」の願いが叶えられ、生活が豊かになりました。

【資料提供：川崎町立川崎第二小学校】

すがわら えいいち 1901年 1983年
菅原 栄一 (明治34年5月21日～昭和58年)

【主な業績】川崎育英会初代理事長

【業績の概要】

今は釜房ダムに沈む川崎町小松倉の出身で、十代半ばに上京して、後の大正12年、警察官となりました。一生懸命仕事に励みましたが、その中で自分の勉強不足を思い知らされるのがたくさんあり、勉強しようと強く思うようになりました。

働きながらの独学です。「三体千文字」を教本にして字を習い、法律の講義録を熟読する等、とても苦勞しながら勉強を続けました。この苦勞した時期に、教育の大切さ・必要性を痛感したのです。

警察官を辞めた後、昭和19年に足立鋼管株式会社取締役就任、昭和24年には日本殖産株式会社を設立して常任取締役就任しました。昭和26年には平和相互銀行常務取締役就任し、昭和38年に銀行を退職しました。同じく昭和38年に(株)建洋社代表取締役社長に就任と、次々要職を歴任したのです。

学問の必要性を痛感して始めた独学でしたが、途中で投げ出さずにやり通したことが、栄一の人となりを作ったのです。

栄一は、経済的に恵まれないために教育を受けられない人を一人でも援助したいという思いがありました。そのため、昭和38年平和銀行を退職した際、その退職金を町に寄付し、その後も現金及び私名義の株を寄付しました。このことが、財団法人の礎を築くことになったのです。

川崎育英会は、郷土の有為な人材を育成する目的で設立されました。昭和39年、初代理事長に就任し、その年から奨学金貸与が始められ、平成23年3月までに延べ152名の奨学生が利用しています。

【資料提供：川崎町立川崎小学校】

おおぬま ちづか 1919年
大沼 千束 (大正8年11月13日～現在)

【主な業績】文化財の保護・発掘・活用

【業績の概要】

東京で生まれ育ちましたが、第二次世界大戦後、復員した時に家督相続のため、本籍地である川崎町に戻り家業の農業に従事しました。昭和24年から地元の高校等で教鞭をとりました。この間「ふるさと」の良さを思うと共に、川崎町の遺産が失われつつある事への危機感を持ちました。これまでも少しずつ文化財興しを手がけていましたが、折しも昭和55年8月1日、川崎町文化財保護委員に任命されるや、幕末期から幻の地蔵として姿を消した笹谷峠の六地藏尊を藪の中から見つけ出して復元するなど活動を始めました。その後、副委員長・委員長を歴任し活動期間はなんと38年に及び、卒寿をはるかに超した現在も在職中という状況です。

その活動は、地域に赴いて話を確かめ、自分の目で見て調べ、考察したものをまとめました。そして、文化財の普及や啓発、整備を進めるなど地道な作業を重ねました。その足跡として「川崎町の文化財」という小冊子をシリーズで発刊、11冊になりました。それは「史実と伝承」・「石像と唐碑」・「神社・仏閣」・碑(いしぶみ)等、多岐にわたるもので、一般の町民にも分かりやすいように工夫されたものでした。石碑シリーズでは、石碑を洗い流し、刻まれた文字を一字一句書き写し、それを「読み下し文」として載せました。「史実と伝承」では、伝承されていた事を掘り起こすなど地道な調査により結果を明らかにしました。このことが、故郷に目を向けるよい機会の提供となり、教育文化功勞者としてとして表彰されるきっかけともなっています。

【資料提供：川崎町立川崎中学校】

にへい ひろし 1925年
二瓶 博 (大正14年8月31日～現在)

【主な業績】阿武隈川の浄化，阿武隈急行丸森～福島間開通に尽力，丸森町羽出庭大橋架橋

【業績の概要】

丸森町を流れる阿武隈川は東北で2番目に長い川で、サケが遡上する豊かな川です。この美しい阿武隈川は、昭和30年頃から川の汚染が目立ち、川の色は赤茶色になり、大量の魚の死骸で真っ白になるぐらいでした。これは、福島県白河市周辺の工場排水と都市家庭からの生活排水も影響していました。その頃川岸の人々は、早朝起きがけに手ぬぐいを下げて川岸で顔を洗い、洗い物はすべて川を利用するなど、川はまさに生活の一部でした。しかし、当時は高度経済成長のために利益が優先されたり、自然保護などの環境問題は無視されたりして、丸森町の人々は、川が汚れていくのをどうすることもできませんでした。



博は阿武隈川のすぐ近くで、7ヶ月の早産で生まれました。その後すくすく育ち、丸森小学校では、ガキ大将として楽しく学校生活を送りました。丸森小学校を卒業後、東京大学へ進学。第二次世界大戦では、海軍潜水学校で特殊潜航艇艇長としての訓練を受けていましたが、無事に終戦を迎えました。そして昭和23年農林省へ入省しました。昭和51年には、食糧庁総務部長から、環境庁水質保全局長に転じ、「公害規制行政」に尽力しました。昭和53年農蚕園芸局長として農林水産省に復帰した後、昭和56年に退官しました。昭和58年には蚕糸砂糖価格安定事業団理事長に就任してからは、平成7年に叙勲の栄に浴し、平成9年には大日本蚕糸会の会頭となりました。16年には総裁常陸宮殿下からシルク業界最高の恩賜賞（賞状は丸森産シルク和紙を使用）を授与されました。

また、博の功績に、阿武隈川の浄化があげられます。阿武隈川の上流に位置する白河の製紙工場などの工場排水と中流の郡山市や、福島市からの生活排水が排出されていたので、その汚濁を削減しないことには、水質は改善されないと博は考えました。そして、環境庁在職当時、福島県環境部に強く要請して、浄化に努めた結果、丸森町の人々は元の美しい川を取り戻しました。

昭和43年、丸森町民の長年の悲願であった国鉄丸森線は槻木と丸森間が部分開通しました。しかし、福島交通のバス路線との競合から、全線開通のめどが立たず赤字路線として廃止の危機に瀕していました。丸森町の人々は、存続運動を行い、切符は必ず丸森駅で往復券を買う等、涙ぐましい努力を続けました。しかし、国鉄丸森線は赤字路線として廃止の指定を受けることとなりました。当時町長だった兄の泰助さんは路線バスか、第三セクターのどちらかを選択するかに追い込まれていました。第三セクターとして存続させるには、丸森から福島までの阿武隈川に架かる橋や線路を通す用地の確保と、福島交通の快諾を得る必要がありました。その際、博が福島出身の亀岡高夫農林水産大臣などへ阿武隈急行の必要性を訴え、兄とともに熱意をもって奔走したことで、平成元年に福島交通も参加する第三セクター阿武隈急行が全線開通するに至りました。

丸森町は「シルクとミルク」を町興しのモットーとしていました。博は、さらなる丸森町の発展のために、阿武隈川をはさんで相互交流の面などで利便性が極めて高い「羽出庭大橋」を架橋しました。一級河川に農道橋があるのは、他に類を見ません。

現在、福島から丸森へ乗車すると、沿線に美しい阿武隈川の眺望を楽しむことができます。それは、博の功績によるものなのです。

【資料提供：丸森町立丸森小学校】

さいとう りすけ 1874年 1926年
齋藤 理助 (明治7年～昭和元年)

【主な業績】電気会社設立，丸森小学校校舎建築への寄付

【業績の概要】

丸森町の中心地に観光名所の一つである「齋理屋敷」があります。この「齋理屋敷」の主人は、江戸から明治・大正昭和時代に代々「齋藤理助」と名乗り、7代目まで丸森町で大きな商売を行っていました。3代目から5代目にかけて、商売の拡充を図り、基盤を作ってきました。その後6代目は、商売だけでなく、丸森町の産業と文化の発展に尽力しました。



6代目理助は、「質実剛健」そのものの人で、気は優しく力持ちであったと言われています。大変心の広い人で、人々を大切にしました。住み込みで働いている人が店の正面にある板戸に落書きをしても特にいさめることなく、当時のまま残されています。

6代目理助は私財を投じて人々の生活向上に大きな貢献を果たしました。

一つは、電灯です。その当時仙台では電灯がついていて、夜でもとても明るかったそうです。理助は、丸森でも電灯をともしないか考えました。金山で製糸工場を営んでいた佐野理八さんらに相談し、大正2年「宮城清滝電灯株式会社」を設立しました。筆甫から勢いよく流れてくる内川に水力発電所をつくり、1580軒もの家に明かりがともりました。



「すごい。夜でもまるで昼間みたいだ。」

と町の人々は、喜びました。

角田市・柴田町まで設置しようと最初はたくさんの方が協力していましたが、それほど遠くまで電気をつなぐことができないことが分かり、少しずつ事業から手を引いていきました。さらに、大正9年変電所から火が出て、会社は多額の弁償金を抱え込みました。

「このままでは町の灯りも消えてしまう。」

と考え、6代目理助は自分だけでも経営を続けようと決心しました。しかし、世の中はだんだんと景気が悪くなり、電気料金を払えない人が増えて、電力会社は宮城県に引き継がれました。

二つ目は、阿武隈川に架けられた船橋を頑丈な木橋にするために、隈共社に参画したことです。

三つ目は、大正14年丸森小学校の校舎を新築するために、敷地の確保や材木の供給など、全てに関わって完成させました。町の子どもたちの教育のためにと、多額の寄付をしてくれたのも6代目理助でした。さらに町内の十数社を集め、神明社を現在の場所に移転させました。その功績を讃え、神明社には理助の大きな石碑が建てられています。

その後、理助の子孫は、仙台に移り住み、昭和61年にお屋敷や蔵は町に寄付され、平成元年から町の宝である「齋理屋敷」として生まれ変わりました。

【資料提供：丸森町立丸森小学校】

ほし たいざぶろう
星 泰三郎

1893年 1982年
(明治26年3月11日～昭和57年8月26日)

【主な業績】金山地区の文化の発展

【業績の概要】

星泰三郎先生は、「真心一筋」、「金山聖人」と言われ、今でも丸森町金山地区の人々からたたえられ、愛されている方です。

先生は、金山町（現在の丸森町金山）に生まれました。

教育の道を志し、大正3年に金山尋常高等小学校に勤めました。その5年後には、26歳の若さで、この学校の校長先生になりました。いつでも、だれに対しても礼儀正しい方でした。また、朝早く起きて道路掃除をしたり、みんなのためになることを率先して行ったりしていたそうです。

こうした姿をほかの先生方や子どもたちが尊敬し、先生の行いを見習ったと言われています。また、先生は、いつも大きな心で人に接し、真心を込めて教育をしていました。

太平洋戦争後間もなく、教職を退き、地元に戻ってきた先生は、金山町助役や金山町選挙管理委員会委員長等、町の多くの役職に就きました。また、金山町公民館の初代館長にもなりました。館長として、戦後の混乱期に裁縫学級や青年学級等を立ち上げ、青少年の育成や地区の活性化に努めました。

その中でも、初代の金山町図書館の館長として、先生は特に力を発揮しました。通算39年間、金山町図書館の館長として勤め、この間一日も休まずに開館し続け、地域の人々に本のすばらしさを広めていったのです。

金山町図書館にかけた先生の情熱や願いは、次のような話から、うかがい知ることができます。

金山町から東京に出て大きな会社を経営している方が、先生の日頃の行いに感心して、たくさんのお金を送ってきたことがあります。それは、先生の家を建てるために送られたお金でしたが、先生は、図書館を新しく建て替えるために使ったのです。

また、先生自身も、自分の小遣いを節約して貯めたお金で本を買い、図書館に寄贈していたそうです。読みたい本がたくさんあるので、図書館の中はいつもたくさんの子どもたちであふれていました。そのおかげで、子どもたちは、ますます本や勉強が好きになったと言われています。先生は、子どもたちが喜んでいる姿を見るのをとても楽しみにしていたそうです。こうして、読書の楽しさを説き、本のすばらしさを広めていったのです。

図書館の館長として先生が大切にしたのは、読書の楽しさを広めることだけではありません。ほかにも、玄関では履物の整理の仕方やあいさつの仕方を優しく教えました。また、どの人にも分け隔てなく優しく接しました。このため、金山町図書館には子どもから大人まで大勢の人が集まるようになったそうです。



先生は金山の人 謹厳高潔 二十六歳にして小学校長に昇進し 郷党子弟の教育に精魂を傾けられる
のちに 初代公民館長となり さらに図書館長を兼ねるなど 精励恪勤 昭和五十七年 病に倒れるまで 一日として怠ることなく 学校教育と社会教育に献身され 七十年に及ぶ
ここに 先生の崇高な業績と遺徳を讃え 永く後世に伝えられんことを希いこの像を建立する
昭和五十九年八月
星泰三郎先生を顕彰する会
会長 伊藤 陸郎 識

こうした先生の功績をたたえ、地域の人々が、金山公民館前に先生の胸像を建てました。金山公民館を訪れる人々の中には、胸像に手を合わせて拝む方が、今なおいらっしゃいます。

〔胸像脇に刻まれている「星泰三郎先生の業績をたたえる文」〕

【資料提供：丸森町立金山小学校】

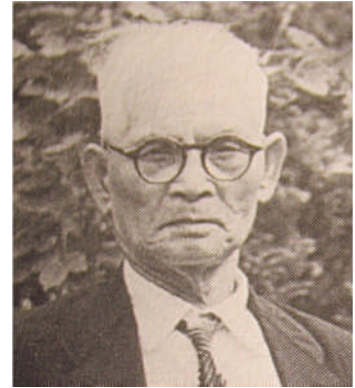
めぐる へいじ 1879年 1976年
目黒 平治 (明治12年～昭和51年)

【主な業績】へき地教育にかけた生涯

【業績の概要】

へき地と呼ばれる筆甫村の教育に生涯をかけて取り組んだのが目黒平治先生です。

筆甫小学校は、大内村の分校から小学校となりましたが、人も設備も学校としてはまだまだ不十分でした。このへき地の村にとどまってくれる先生を見付けることはとても難しいことでした。当時の村長の目黒万治さんは、息子の平治を仙台の師範学校（学校の先生）に入学させ、筆甫村の先生にすることにしました。



平治先生は、明治33年に2年半におよぶ仙台での勉強を終え、筆甫に戻り先生となりました。

「教育を受ければ、未来に可能性が開ける。」と平治先生は信じていました。そして学んできたすべてのことを、筆甫の子どもたちに教えようと教育に励みました。

当時の筆甫の産業は蚕や炭焼きが中心でした。畑は山の斜面にはりつくようになり、水田は狭く、多くの家は貧しい生活でした。

子どもたちは生活を支える働き手で、炭を運んだり、桑をつんだり、水くみをしたり、子守りをしたりするなど、たくさんの仕事をしていました。口減らしに、子どもを金持ちの家に働きに出すことが当たり前の時代でした。子どもたちは重要な働き手であったために、忙しい時は親が学校を休ませてしまうこともありました。平治先生は、学校を仕事のために休んでいる子どもたちのことを心配し、思い悩みました。

平治先生が筆甫に戻った頃から凶作が続き、学校どころではない家庭が増えていました。「百姓に、ましてや女子に、学問はいらねえ。家には仕事がいっぱいあるで……」と親が学校をやめさせてしまうことさえありました。

(村の外はどんどん変わっていくのに、この村は変えようがないのか。村の子どもたちは世の中から取り残されてしまうのか。)

平治先生は、思い通りに進まない改革に、いらだつ気持ちを抑えながら村の至る所に出かけて行きました。家々を訪ね、子どもたちの様子を見て歩きました。親たちには、これからの世の中について語り、どこへ行っても働ける力を子どもたちにつけてやることの大切さを話して歩きました。

子守りをしながらでも、学校に来させるように親を説得していきました。

凶作の続く間は、授業が午前中で終わるような工夫もしました。子どもたちが、午後からは家の手伝いをできるようにするためです。その努力が少しずつ実り、筆甫の子どもたちは学校を休まなくなり、卒業前にやめる子も減っていきました。

少しずつの変化が積み重なり、平治先生の在任24年の間に子どもたちの学力は高まっていきました。

備考：在任24年間の内、(明治37年～大正14年 第11代校長を務める)

大正8年 筆甫村歌作成(目黒平治作詞、歌曲は鉄道唱歌)

【資料提供：丸森町立筆甫小学校】

すずき
鈴木

まさお
正夫

1900年
(明治33年1月30日～昭和36年9月28日)

【主な業績】民謡の父，日本一の民謡歌手

【業績の概要】

正夫は大内村（現在の丸森町大内）に生まれ，小学校の頃から歌が得意でした。学芸会では独唱をしてみんなを感動させていました。村内ばかりでなく，他の村や町でも有名になっていきました。17歳で結婚した正夫は，朝早くから夜遅くまで一生懸命農業の仕事をしました。山の草刈りの時には歌声が山々にこだまし峠を越える人たちも上手な民謡に聴きほれるほどでした。

23歳の時，正夫はみんなに愛される民謡を歌うために相馬に住む堀内先生にお願いして，民謡を教わることになりました。しかし，民謡の勉強を続けていくには大変な苦勞がありました。正夫は，一日の仕事をきちんと終え，さらに夜の仕事も済ませ，親たちが寝静まってから先生のもとへ通うことになりました。夜の仕事が終わるのが午後9時か10時，その上，家から相馬までの距離は片道三里（12キロメートル）もありました。時には明け方まで熱心に教わり，1時間しか寝られない日もありました。

25歳から，東北民謡育ての親と言われた後藤桃水先生のもとで修行するようになりなりました。26歳の時には相馬で開かれた民謡大会で優勝し，金時計をいただいたり，27歳の時にはレコードも出し，ラジオ番組にも数多く出演したりしました。こうして，鈴木正夫の名は全国的に知られるようになっていったのです。

40歳の時，相馬の古い歌である相馬節をヒントにして，独自の「ハァ～」で始まる新相馬節を誕生させました。また，相馬盆歌や炭坑節も人気を集め，51歳の時には，第一回紅白歌合戦にも出演し，正夫は文字通り民謡界の第一人者になりました。

相馬盆歌は炭坑節とともに，戦後最も広く歌われた歌の一つとされています。

次々とレコードを出す一方，歌の公演で全国を回って歩きました。忙しい毎日が続く中，若い民謡歌手を育てることに力も注ぎました。

57歳の時に正夫の努力が認められ，日本民謡協会の最高技能賞を受賞し，文部省（当時）と日本ビクター株式会社からは功勞賞を贈られました。

どんな時でも大好きな歌を忘れず，希望を捨てずに頑張り通した鈴木正夫は，まさに民謡の父，日本一の民謡歌手と呼ぶにふさわしい人です。

現在，丸森から相馬へぬける国道113号線の大沢峠に鈴木正夫民謡碑が建っており，美しい歌声を聴くことができます。



【資料提供：丸森町立大内小学校】

やまなみさんえもん よしあつ 1821年 1883年
山並算右衛門 美篤 (文政4年～明治16年10月2日)

【主な業績】和算の指導及び普及

【業績の概要】

丸森町小斎地区にある鹿島神社には、地元の和算家を書いた五面の算額が奉納されています。算額とは、数学の問題と計算方法や答えを書いたものです。この和算は、みなさんが学校で学んでいる算数と同じではありません。

和算は、非常に高度な数学で、特別な表現方法が使われているために、和算を研究した数学者でもなければなかなか解くことはできません。

このような難しい和算の額（算額）がなぜ神社に奉納されているのでしょうか。それは当時の和算家が研究を発表する機会に恵まれていなかったからです。書籍として発表するには、大変なお金がかかります。自分の研究成果を広く永く世に伝えるためには、額に描いて神社を訪れる人々に見てもらいよりほかに方法がなかったからなのです。

和算が盛んに研究されるようになったのは、江戸時代はじめ毛利重能（もうりしげよし）や吉田光由（よしだみつよし）らの数学者が現れた頃です。仙台藩に初めて和算が導入されたのは、1684年頃のことです。小斎で和算が学ばれるようになったのは、山並算右衛門（やまなみさんえもん）と岸波七右衛門（きしなみしちえもん）の二人が大勢の子弟に教えるようになってからのことです。

山並算右衛門（やまなみさんえもん）は、名を美篤（よしあつ）といい、代々佐藤家の家臣を務める家に生まれ、幼い頃から算学を熱心に学んでいました。十四歳にして初めて伊藤隸尾（いとうれいび）の門下に入り、熱心に学問を学び、ついには弟子に教えることができるようになりました。

小斎に帰った算右衛門は、遊仙寺に多くの弟子を集め熱心に和算を教え、その功績が認められ佐藤家の家老に抜擢されました。算右衛門に弟子入りした人々は、米や野菜などの作物を育てながら、和算の学問に励んでいました。

「おばんです。昨日の算術の問題、解けたかい。」

「いや、まだまだ。なかなか難しくてさっぱり進まねえ。」

弟子たちは、お互いの家を行き来して学んだり、時には鍬をかついで帰宅する途中で問題を出し合って解答したりするなどして、時のたつのも忘れて、日々あらゆる場所で学びました。

小斎の人々が弟子になって和算を学んだのはもちろんのこと、島田、田林、枝野、金津、大内、金山、山下、坂元、新地などの地区からもたくさんの人々が教えをこいにやってきました。

算右衛門は、年号が明治になると小斎小学校の教師になり、子どもたちに算学などを教えました。教師をやめた後は、「義解算法」という和算書の著述に励みましたが、病で倒れて明治16年（1883年）10月2日に62歳で亡くなりました。

算右衛門亡き後も、小斎の地では弟子たちによって和算は広まり、他市町村へも出かけて和算を指導する優れた数学者もいたそうです。

そのような指導者から和算を学ぶために、多くの人々が様々な地区から小斎を訪れるようになったので、小斎地区は「数理の里」と呼ばれたそうです。



遊仙寺にある山並先生の碑



弟子たちが奉納した「和算額」

【資料提供：丸森町立小斎小学校】

さとう せいえもん
佐藤 清右衛門 (1861年～1918年)
(文久元年～大正7年)

【主な業績】丸森、館矢間を結ぶ舟橋(ふなばし)の整備，発展

【業績の概要】

福島県，宮城県を流れる阿武隈川は，近年では昭和61年8月5日の台風10号，平成14年7月11日の台風6号による災害に見舞われているように，昔から暴れ川として有名な第一級河川です。そのため，長い間橋を架けることができず，川の往来は流れが穏やかな時に渡し舟を使って行っており，生活はとても不便でした。丸森や館矢間の人々にとって，橋を架けることは長年の夢でした。

明治25年(1892年)に限共社(わいきょうしゃ)という会社が，人々の念願であった丸森，館矢間を結ぶ橋を完成させました。全長170mの橋は舟橋といい，舟を何そうかつなげ，その舟に柱を建て，柱を支える仕組みになっていました。会社が造ったということから分かるように，当時は橋を通る人から通行料をとり，その料金を経営していました。佐藤清右衛門さんは限共社の社員でお金の管理の仕事をしていました。清右衛門さんは，橋の完成で丸森の人々の暮らしも館矢間の人々の暮らしも便利で豊かになっていくととても喜びました。



しかし，阿武隈川は大雨が降るたびに容赦なく舟橋を襲いました。明治27年(1894年)の大雨では，舟橋の一部が流されてしまいました。さらに明治29年(1896年)にはせっかく修理した舟橋が全て流されてしまいました。修理に使ったお金の支出もあり，会社には新しく橋を架け替えるためのお金があまりありませんでした。その時，清右衛門さんたちは自分のお金を出し合って，橋の架け替えを行ったそうです。ところがその後も，明治35年，37年，38年に暴風雨による増水で，舟橋は大きな被害を受けました。度重なる修理で，会社の経営はもう無理だと，一人また一人と会社を辞めていきました。

そして，ついに会社は清右衛門さん一人になってしまいました。丸森や館矢間の人々の暮らしのことを考え，ここで橋をなくしてしまうわけにはいかないと，清右衛門さんは一人で舟橋を守ることを決心しました。周囲の人たちは，「清右衛門一人で何ができるものか。いつまで続くのやら。」「阿武隈川に橋を架けるなんて，やっぱり無理だったんだ。」と陰口を言う人もいたそうです。また，橋の修理代の工面に駆け回っても「自分のお金もうけのためじゃないか。」と相手にしてもらえないこともあったそうです。しかし，清右衛門さんはくじけずに，後に宮城県が舟橋の経営を引き受けてくれるまで一人で会社を続け，舟橋を守り続けたということです。

清右衛門さんの努力は人々の心を動かし，舟橋は木橋となり，昭和4年に現在の丸森橋へと変わっていきました。平成24年には丸森橋より少し下流に全長556mの丸森大橋が完成予定です。

丸森町の神明社境内には，限共社と佐藤清右衛門さんの功績をたたえた記念碑が建立されています。

参考文献：「郷土道徳副読本 ふるさとの先人に学ぶ」(丸森町教育委員会)

写真協力：丸森町 齋藤良治 様

【資料提供：丸森町立館矢間小学校】

はらだ けいや 1888年 1951年
原田 敬也 (明治21年～昭和26年)

【主な業績】大張電気導入事業，県道改修事業，自動車開通事業

【業績の概要】

大正11年（1922年）のことです。当時，大張村の周りの町は新しく道路がつくられたり，電気が通ったりして人々の生活が便利で豊かになりつつありました。ところが大張村は町から離れており，そこに暮らす人々は便利さや豊かさを味わうまでに至っていませんでした。道路は細く険しく，人や馬が通るのもやっとで，町に用事があっても歩いていくしかありません。

また，電気はまだ通っていないので，夜はろうそくやランプ，囲炉裏の火などで明かりをとっていました。

当時，大張村には県会議員の前田敬也がいました。敬也の家は代々大張で指導的な役割を果たしてきました。敬也自身も，28歳で大張村の助役になり，その後も郡会議員や大張村長などを務めてきました。

「大張村にも電気を通して，人々の暮らしを便利で豊かにしたい。」

敬也さんは，いつしか強くそう思うようになりました。

そこで敬也さんは，熱心に村の人たちに電気を通すことの必要性を訴えました。しかし村の人たちは，お金がかかることや，田んぼや畑の仕事が忙しいことなどを理由に，あまり賛成してはくれませんでした。

それでも敬也はあきらめませんでした。何度も電気を引くことを電気会社にお問い合わせしたり，村の人たちにいかに電気が便利なものであるかを訴えたりしましたが，うまくはいきませんでした。敬也は電気を引くために，自分のお金を出し，田んぼや財産まで売りました。だんだんと暮らしが苦しくなってきましたが，それでも

「何としても大張に電気を通したい。みんなの暮らしを豊かにしたい。」
という願いを捨てることはありませんでした。

そんな敬也の姿を見て，

「できることを手伝いたい。」

「敬也さんと一緒に頑張ろう。」

と考える人が増えてきました。敬也はそうした地域の人々と山の中に電柱を立てました。それはとても大変な作業でした。敬也と大張の人々は，必死に仕事を続けました。

そして，とうとう大張に電気が通りました。地域の人々みんながこの日を待っていました。

「うわあ，昼間のように明るいなあ。」

みんなが喜ぶ顔を見て，敬也は自分の願いがかなったことを実感したのです。

このほかにも，新しい道路をつくりバスを走らせることで，町や周りの地域と簡単に行き来できるようにするなど，敬也は大張の人々のためにたくさんの仕事をしました。こうして，人々の生活は便利で豊かになり，現在につながっているのです。



【資料提供：丸森町立大張小学校】

やっ
谷津 はつね ^{1907年} (明治40年～^{1996年}平成8年)

【主な業績】37年間で4000人の赤ちゃんを取り上げた助産婦

【業績の概要】

「赤ちゃんが生まれそうです。お願いします。」
今晚も大きな声で、目を覚ましました。時計は夜中の1時を過ぎておりました。4000人も多くの赤ちゃんを取り上げ、尊い生命を光り輝かせてくれた天使のお産婆さんの名前は、谷津はつねです。

はつねは、明治40年(1907年)丸森町耕野(当時の伊具郡耕野村)に生まれました。

小・中学校(当時の尋常小学校, 尋常高等小学校)時代, はつねはとても勉強が好きで成績も良く, 大張尋常高等小学校を卒業する時, 将来世のため, 人のためにつくしたいと考え, 「お産婆さん」になることを目指しました。

大正11年(1922年)3月, 尋常高等小学校を卒業すると仙台に住むおじさんの家に下宿し, 中村産婆学校に入学しました。産婆学校では産婆学や看護学の勉強に励み, 優秀な成績で卒業しました。

昭和3年(1928年), 当時非常に難しいといわれていた「宮城県産婆学説試験」に合格しました。そして, 2年ほど仙台の産婆医院につとめ, 産婆の修業に励みました。その後, 昭和6年(1931年)ふるさとの耕野に帰り, 当時の耕野村中ノ沢の生家でお産婆さんの仕事を開業しました。ついに尋常高等小学校時代からの夢を, 24歳の若さで実現させました。昭和6年の耕野村の1年間の出生数は103名でした。

はつねは, 昭和11年(1936年)4月, 結婚を機に大張村大蔵字川前に住居を移し, お産婆さんの仕事を続けました。常にかすりのもんぺに肩掛けかばんの服装で, 交通手段は, 依頼された家庭に一刻も早く到着するように考え, 当時大変珍しかった婦人用自転車でした。冬期間, 積雪で自転車が使用できない時は, ゴム長靴を荒縄で3回ほど回して滑り止めにして歩きました。地元の大張・耕野をはじめ, 大鷹沢・柳沢・赤沢・十鉢などの地区を1日に何軒も訪ねることが常で, 自宅の玄関の黒板に訪問順に行き先が列記されていたそうです。仕事柄, 2～3日続けて家を空けることもたびたびで, 昼夜を問わず頼まれることも多く, 夜中に起こされることも多かったそうです。

はつねは, 「赤ちゃんが生まれるのをいっしょに喜びたい。」と考え, 多くの尊い生命の誕生を母親と共に見守りました。協定料金をいただくこともなく, 仕事一筋に頑張りました。

61歳になった昭和43年(1968年), 角田市や白石市に産婦人科の病院の開院もあり, はつねはお産婆さんの仕事を引退することになりました。お産婆さんとして開業以来37年間で取り上げた赤ちゃんは実に4000人にもものぼりました。

引退したはつねは, 「夜中に起こされなくてもよくなった。」とたびたび口にし, 37年間を振り返っていたということです。

平成8年(1996年)10月, はつねはお産婆さんとして取り上げた4000人の人々の幸せを祈りながら, 安らかに89年の生涯を閉じました。



【資料提供：丸森町立大張小学校】

おの きゅうしん 1898年 1971年
小野 久進 (明治31年～昭和46年)

【主な業績】 耕野小学校の校歌や耕野振興歌を作詞

函南書道会の初代会長・東北書道会副会長として、書道の発展に貢献

【業績の概要】



〈作詞家としての小野久進〉

丸森町立耕野小学校の校歌は、昭和24年（1949年）に小野久進が作詞しました。

耕野まちづくりセンターの歌として昭和45年（1970年）に

制定された耕野振興歌も、久進が作詞したものです。

耕野地区民は、毎年、耕野小学校運動会・耕野地区民体育祭の開会式で、耕野振興歌を声高らかに歌います。耕野小学校の校歌と耕野振興歌の歌詞には、自分の郷土である耕野の地を深く愛し、その発展と繁栄を願った久進の思いが強く込められています。

☆ 小野久進さんは、耕野地区の人たちが親しむ耕野小学校の校歌や耕野振興歌を作詞したのね。



〈書道家としての小野久進〉

久進は、有名な書道家でもありました。

久進は、耕野村に生まれ小さいころから書が大好きでした。本格的に書道家になることを夢みて書の道を志したのは、ある書との出会いがあったからです。書と出合ったとき、久進は、「これだ、この書だ、なんとすばらしい。」と心を動かされ、目の前が明るくなったと言われています。

久進を目覚めさせた書の作者は松本芳翠氏でした。松本氏は、当時芸術院会員、日展参与という有名な書道家でした。久進は30歳を過ぎていましたが早速松本氏に弟子入りしました。

松本氏との出会いから、昭和46年（1971年）、73歳でなくなるまでの40年間、久進は来る日も来る日も書に打ち込みました。その努力は並大抵のことではなかったようです。久進は、ついには松本氏に肩を並べるほどの書道家となりました。

久進は松本氏と生涯兄弟のようにつきあいました。久進は、お世話になったお礼に松本氏から漢詩を贈られたことがありました。久進は、函南書道会の初代会長・東北書道会副会長として、書道の発展に地道に貢献しました。

昭和52年（1977年）、久進の七回忌に、門下生が多数集まり、師の偉業を後世に伝えようと、丸森橋の北たもとに「小野榎陵先生詩書之碑」を建てました。その碑には、久進が阿武隈川を舟下りした際に詠んだという「瓢を携えて舟を下る」の漢詩が刻まれています。

参考文献：ふるさとの先人に学ぶ（2006年 丸森町教育委員会発行）

☆ 校長室に飾ってある額縁の校歌は、小野久進さんの直筆なんだね。



【資料提供：丸森町立耕野小学校】

おおつき ぶんべい 1903年 1992年
大槻 文平 (明治36年9月27日～平成4年8月9日)

【主な業績】 国家社会の発展に尽力

【業績の概要】

大槻文平は、丸森町の厳格な家庭に生まれ、7人兄弟の長男として育ちました。子どもの頃はかなりのガキ大将で、仲間を引き連れては兵隊ごっこをやったり、魚とりをしたりと山や川で自由奔放に遊びまわっていました。健康に恵まれ体も大きく、勉強でも運動でも何をやっても一番でした。父親は長男として家督を継ぐことを望んでおり、中学進学には反対でしたが、父親の友人が強く説得してくれたこともあり、旧制角田中学校（現在の角田高等学校）に進学します。進学するにあたり、父親と五つの約束を交わしています。



- ①中学校から上の学校に行かぬこと。②通学の途中、道草をくって阿武隈川で泳がないこと。
- ③木沼(通学途中の村落)で水を飲まないこと。
- ④自転車で通わないこと。⑤寄宿舎に入らないこと。

大槻家の大事な家督としての長男を病気や怪我から守り、立派に育てようとする父親の思いが伝わってきます。文平はその約束を守るために、自宅から学校までの往復16キロの道のりを朝は4時起きして4年間かけて徒歩で通いました。向学心に燃え成績優秀であったことから、角田中学校5年生の時に親元を離れ上京、第一高等学校、東京帝国大学法学部(現東京大学)へと進学、卒業後は三菱鉱業に入社しました。

入社後は、北海道の美唄炭鉱を振り出しに、労務関係の仕事に就きました。常に従業員とその家族とのコミュニケーションを忘れず、労働者の教養・人格を高めるため成人教育にも非常に力を入れました。戦後は、石炭から石油へのエネルギーの転換期でもあり、炭鉱の縮小や大量の人員整理などに迫られながら、労働組合との厳しい折衝などにも真正面から向き合いました。就職幹旋に全力を尽くし、失業者を出さないことに最も重点を置きました。このことが、会社最大の危機を救う結果となり、逆境の中で不屈の経営者精神を培うことにもなりました。

大槻さんは「会社は、究極においては国家社会に奉仕するという大義を忘れてはならない。あくまで国家社会に奉仕するということを念頭において仕事をしなければならない。」という信念のもと、常々から世の中のためになるよう努めたいと考えていました。また「物心ともにハンプル・ライフ(質素だが、心は豊かに)に徹すべし」を提唱しました。

昭和38年に三菱鉱業セメント(株)(現三菱マテリアル)社長に就任し13年間社長生活を続けた後、昭和51年に会長就任、昭和54年には日本経営者団体連盟(日経連)会長となるなど数々の要職を歴任しました。中央における経済界での活躍のみならず、行政面においても新行革審会長として行政改革の推進に尽力しました。

こうした長年の功績が認められ、文平は昭和48年に勲一等瑞宝章、昭和56年には勲一等旭日大綬章を受章しました。

参考文献：私の履歴書 経済人16 (日本経済新聞社刊)

【資料提供：丸森町立丸館中学校】

かがわ もへい
加川 茂平 (明治13年～昭和32年)

【主な業績】 郷土の発展に尽力

【業績の概要】

加川茂平は、1880年、丸森町金山町の桶職人の家に生まれました。木を切り、削り、ひとつひとつ桶を作り上げていく父の姿を見て育った茂平は、自分も手に職をつけたいと考え、理髪業の道を選びました。そして、お客さんに喜んでもらえる技能を身に付けるため各地で修行に励みました。

その後、茂平は東京に出て店を開きました。茂平の店は、確かな技術とお客様に対する親身な対応から、客の数を確実に増やし、店も少しずつ大きくなっていきました。

仕事で忙しい日々が続いていた茂平でしたが、いつも頭に浮かんでくるのは、自分を育ててくれたふるさとのことでした。茂平は（私は今、東京に住んでいるが、ふるさと金山の発展のために何かできることはないものだろうか）と考えました。

そこで茂平は、これまで培ってきた理髪の技能とお客様に対する感謝の気持ちをふるさとの若者に教えていこうと考え、若者に理髪の道で仕事ができるように一生懸命教えました。茂平のもとで学んだたくさんの弟子たちは、それぞれに店を開き、暮らしをたてることができるようになり、茂平は理髪の大先輩としてみんなに慕われました。

また、茂平は、これからのふるさとを発展させていくためには、若者の教育が大切であると考えました。そこで、昭和8年（1933年）1月に、「大東京金山会」の発起人の一人として、会を結成させました。この会は、毎年春に、郷土の小学生や青年学校の卒業生の中から、将来もふるさと金山に残り、生活を続けようとする3、4名の若者を選び、会員が費用を出し合っ

て、東京の様子を数日間にわたって見聞きさせるものでした。東京の街並みや文化、経済、政治など、日本の中心である東京を自分の目で確かめ、様々な体験を積むことは、これからふる

さとの将来を担う若者たちにとって、この上ない貴重な体験となったのでした。この制度は、「帝都見学生」といい、何年にもわたって行われました。この会に参加した人たちは「報徳同士会」という会を結成して、ふるさとの新しい町づくりに取り組んでいきました。

「大東京金山会」は、現在は「東京金山会」という名称になりましたが、茂平のふるさとの発展を願う志は、今も受け継がれています。



第7回帝都見学生を案内する茂平さん（右端）

【資料提供：丸森町立丸森東中学校】

はやかわ みのすけ
早川 巳之助 1905年～1944年
(明治38年～昭和19年)

はやかわ
早川 みつい 1911年～1995年
(明治44年～平成7年)

【主な業績】 郷土芸能「青葉の田植踊」の伝承

【業績の概要】

丸森町大内青葉地区に伝わる豊作を祈る郷土芸能、「青葉の田植踊」。だれがつくり、どのように伝わったかなどは、はっきりとわかりませんが、鎌倉時代に京都で生まれたものを山伏がもち伝え、広まったものといわれています。

明治20年(1887年)ごろまでは、小正月にそれぞれの家を、熊の入、山屋敷、横手地区の人たちが一団をなして、舞って歩いたといわれています。

内容からみて、仙台市秋保の田植踊と交流があったと思われる、羽黒修験であった玉宝院(旧熊野神社別当)を通じて、大内地区に伝わったものといわれています。

ハヤシは大太鼓、笛、鉦からなり、曲目は、鈴田植、あや竹、扇田植、先代田植、銭太鼓のほか、弥十郎の前口上と歌詞十二章が伝承されています。

この田植踊を復活し、現在のような形にするまでは、並々ならぬ努力がなされました。多くの人々の努力と苦労がありますが、この「青葉の田植踊」を語る上で、巳之助・みつい夫婦をぬきに語れません。

「自分たちの地区に残る、先祖からいただいたすばらしい財産をいつまでも大切にしたい。青葉の田植踊を、ぜひこれからの時代の人々に残さなければ・・・。」

このような固い決心が早川夫婦にはありました。そしてその思いを現実のものにしたのです。

早川夫婦は、こうした思いをもって、地区内の大内小学校青葉分校の子どもたちへの指導はもちろんのこと、地区民あげての保存会をつくり、後継者の育成に全力をあげて取り組みました。

現在では保存会を中心にして、地区ぐるみで継承に力を入れています。

この「青葉の田植踊」は、現在、4月18、19日と9月18、19日、熊野神社のお祭りに奉納されています。また、昭和43年(1968)12月13日、すばらしい踊りだということで、宮城県無形民俗文化財に指定されました。

早川夫婦の強い思いは、青葉地区民に受け継がれ、すばらしい「青葉の田植踊」の継承とともに青葉地区民の心をつなぐ大切な絆となっています。



子どもたちに「田植踊」を指導する“みついさん”



早川夫妻(前列)と保存会の皆さん

【資料提供：大内中学校】

さとう きよし
佐藤 清 (嘉永5年～大正8年)

【主な業績】自由民権運動・地方自治の発展に貢献

【業績の概要】

命を投げ出して国のため人のために尽くした高い志を持つ佐藤清は、大張大蔵に嘉永5年（1852年）士族佐藤徳治清長の長男として生まれました。仙台藩の家臣の子弟を育成する藩校「養賢堂」で学び、そのときから国の政治を何とかしなければならぬと考えていました。

その後、新しい時代を夢見ながら自分の志を実現させようと福島で新聞社を経営、自由民権運動に参加し人々の声を聞いて政治を行うよう国会の開設を呼びかけました。福島県の自由民権運動は、全国の重要な役割を果たし中心的なものでした。

明治12年（1879年）には、「共愛同謀会」がつくられ、福島で初めての公開政談演説会を開き、各地をまわって民権思想を広めようと努力しました。そして、当時の政府に、自分の意見を



大張まちづくりセンター前にある追念碑

申し立てることもありましたが、県令（県知事）三島通庸の弾圧にあい、内乱予備罪として留置所に入れられ、厳しい拷問を受けました（福島事件）。

しかし、自分の志を変えようとはせず、その結果、国政の秩序を乱すものとして投獄され厳しい日々を送ることとなりました。

その後、大赦により故郷大張村に帰ることができ、第2代村長に選ばれました。明治30年（1897年）には県議員となり県参事官として地方自治に尽くし、さらに明治33年（1900年）には衆議院議員となり、かねてからの主張を貫いて自由民権の主張と実現のために生涯をささげた偉大な先駆者として後世まで称えられました。



【資料提供：丸森町立丸森西中学校】

大河原教育事務所管内の偉人に関する自作視聴覚教材一覧

仙南地域広域行政事務組合視聴覚教材センターの自作視聴覚教材から、偉人に関する作品を集めた一覧です。ぜひ、ご活用ください。

協力:仙南地域広域行政事務組合視聴覚教材センター

ビ デ オ 作 品

| 教材番号 (コード) | 教 材 題 名 | 時間 | 対 象 | 制作年・ 購入年度 | 内 容 |
|---------------|---------------------------------|-----|-----------------|--------------|--|
| V0057 | 大河原のなりたち ～大河原の歴史～ | 15分 | 少年 一般 | 1978年度 | 江戸時代から現在までの大河原町の成り立ちを、尾形橋の変遷を追いながら、スライドで再現したもの。(スライド教材S0117を録画教材化したものです。) 【制作者】大河原社会科教育研究会 |
| V0063 | 大河原の歴史 ～六沼干拓～ | 17分 | 少年 一般 | 1981年度 | 総延長17kmに及ぶ船岡用水の建設と、84haの水田干拓事業を成し遂げた先人の苦労の跡を追いながら、郷土を拓いた人々の苦労の重さに共感する。(スライド教材S0131を録画教材化したものです。) 【制作者】大河原南小学校社会科部 |
| V0068 | 白石和紙と紙すき工人 | 20分 | 少年 一般 | 1982年度 | 白石和紙の製作工程を、ただひとりの制作者となった遠藤忠雄さんの作業を通して説明している。(スライド教材S0161を録画教材化したものです。) 【制作者】白石市婦人ボランティアサークル 大原美恵子 |
| V0132 | 稲作の水を求めて ～黒沢尻用水～ | 17分 | 少年 一般 | 1985年度 | 地域の水田を潤している用水は、なぜ蔵王山の澄川から引いてくるのか、松川と白石川の酸性が強い水を避けて、先人たちが稲作に適した水を求め、用水を作り上げた労苦を映像資料として教材化。 【制作者】金ヶ瀬小学校 服部和憲 |
| V0133 | 大河原の生んだ詩人 尾形亀之助 ～その虚無の世界～ | 20分 | 中学校(全般) 高等学校 | 1985年度 | 明治時代後半から大正・昭和時代に生きた大河原町出身の詩人・尾形亀之助。彼は醸造業を営む旧家の長男に生まれたが、鋭い感性の赴くままに詩作と絵に没頭し、いつしか「虚無」の虜になっていく。彼の歩んだ人生と、彼が見つめ続けた「虚無」の世界を、彼の詩を通して紐解いていく。 【制作者】大河原町自作視聴覚教材制作グループ |
| V0239 | 角田用水 | 11分 | 少年 一般 | 1987年度 | 角田用水の作られた理由と、作られた当時の工事の様子、その苦労を知らせるとともに、今も角田盆地の水田を潤す水を確保するための工事が続けられていることを知らせる。(スライド教材S0132を録画教材化したものです。) 【制作者】角田小学校 斎藤 賢 |
| V0241 | キリシタン迫害とその残照 ～県南にみるかくれキリシタン～ | 18分 | 少年 一般 | 1987年度 | 日本に伝来したキリスト教の歩みを知らせるとともに、今まで仙南地方に見られなかった隠れキリシタンの遺跡や遺物、伝承などが自分の故郷にも残っていたという事実を内容とした作品。厳しい弾圧の中で最後まで信仰を捨てなかった信者の願いや生き方を今も郷土に残存するもの。 【制作者】大河原町自作視聴覚教材制作グループ 小室かつ彥(スライド制作) |
| V0314 | 村田商人の草分け ～山田備後～ | 20分 | 一般 | 1988年度 | 村田は、江戸時代後半から命じ・大正時代にかけて仙南地区の商業の中心であった。古文書を紐解くと、村田商人の草分けとも言える山田備後の姿が見えてきた。山田備後の生涯と、その当時の生活の様子や人々を紹介した作品である。(スライド教材S0178を録画教材化したものです。) 【制作者】小室かつ彥 |
| V0500 | 一本のこけし | 20分 | 少年 一般 | 1989年度 | 七ヶ宿町稲子に住むこけし工人、名人・大葉亀之進さんの手で、1本のこけし作り出されるまでの1年数ヶ月を、材料となる木の伐採から製材・加工に携わる人々の姿も交えながら紹介している。1本のこけしに込められた大葉さんの愛情が、その制作場面を通して伝わってくる。 【制作者】湯原ビデオクラブ 島津照夫 |
| V0503 | 新天地を求めて ～白石片倉氏族北海道開拓～ | 18分 | 一般 | 1989年度 | 武士が支配した江戸時代が終わった明治時代初期、白石の片倉藩士たちは北海道へ渡った。彼らが何を求め、何のためにはるばる海を渡ったのか。この作品は、白石片倉家中旧武士たちの北海道移住開拓の記録を基に、今日の発展の基礎を築いた先人たちの足跡と苦労を明らかにしていく。(スライド教材S0176を録画教材化したものです。) 【制作者】大河原町自作視聴覚教材制作グループ 高野邦雄 |
| V0593 | 西根の歴史1 ～毛萱のため池～ | 20分 | 小学校高学 年 | 1990年度 | 本作品は、幕末から明治初期にかけ、毛萱村(現在の角田市西根地区毛萱)で作られた、ため池作りの努力を道德の時間の資料として教材化したものである。明治初期、当時の毛萱村の肝入り(村長)・島津謙一郎が日照りが続いていることを心配し、村人たちを集め解決の方法を話し合う会議を開いた。庄司平次はため池を作ることを提案するが、ため池を作ることは多額の費用と年月と労力が必要なので、反対するものも多かった。島津郎と庄司は村人たちを説得し、ため池を作ることが決まった。いくつかの困難に負けず、10年後に4つのため池が完成する。この作品を視聴させ、先人の努力や苦労と郷土に対する思いを感じ取らせ、登場人物の行動や身の上を考えさせ、島津や庄司の郷土に対する思いを掴ませる。(スライド教材S0184を録画教材化したものです。) 【制作者】西根小学校 大脇賢次、加藤正伸 |
| V0594 | 西根の歴史2 毛萱伝説 ～富沢の平七～ | 15分 | 一般 | 1990年度 | 本作品は、角田市毛萱に伝説として残っている「孝子平七」の生き様を子どもたちの劇により表現し、それをさらに教材化したもの。社会教育の場における利用を中心とするが、小学生では利用できる内容となっており、学校教育の場での利用も可能である。 【制作者】西根小学校自作教材グループ 大脇賢次 |
| V0701 | 大河原の生んだ歌人 ～佐藤佐太郎～ | 19分 | 一般 | 1990年度 | 名実ともに昭和短歌界の第一人者であった佐藤佐太郎の歌碑が大河原町内にあるが、その佐太郎が大河原町内の出身者であることを知る人は少ない。そこで大河原で生まれた佐太郎の生い立ちと短歌の繋がり等について、録画教材化した作品。【制作者】大河原中央公民館、大河原町自作視聴覚教材制作グループ |

| 教材番号 (コード) | 教 材 題 名 | 時間 | 対 象 | 制作年・ 購入年度 | 内 容 |
|---------------|---------------------------|-----|--------------------------|--------------|--|
| V0795 | 阿武隈川の舟運 | 20分 | 一般 | 1990年度 | 江戸時代から明治・大正の時代まで、阿武隈川は舟運が盛んであった。この阿武隈川の舟運を、いつ誰が、どんな目的で始めたのかを紹介した作品。(スライド教材S0193を録画教材化したものです。) 【制作者】鈴木俊光 |
| V0803 | 大河原の町の職人 ～失われゆく伝統～ | 20分 | 一般 | 1990年度 | 下駄屋、鍛冶屋、など、大河原町の職人の変遷を通して町の歴史を考える。 【制作者】大河原町自作視聴覚教材制作グループ、大河原町教育委員会 |
| V0928 | 大河原の俳人 村井江三 | 30分 | 中学校(全般) 高等学校 | 1994年度 | 村井江三は寛政8年大河原町に生まれ、少年の頃から俳諧の才能があると 言われた。彼の人生を紹介するとともに、残した足跡と大河原町の文化活動 に与えた影響を探る。 【制作者】大河原町 |
| V1067 | 佐野製糸場 ～明治を支えた女工たち～ | 18分 | 少年 一般 | 1995年度 | 佐野製糸工場は、明治18年、佐野理八によって丸森町金山に建てられた。 以後52年間、良質の生糸を生産し、アメリカヘサノカンパニーシルクとして輸 出するほどの大工場となる。その工場の繁栄を支えたのは日夜働く女工たち であり、現代の労働条件に比べれば必ずしも楽とは言えないものであった。 この女工たちの足跡をたどり、佐野製糸工場とはどんな工場であったのかを 明らかにしていく。(スライド教材S0198を録画教材化したものです。) 【制作者】丸森小学校自作教材制作グループ 井上竜一 |
| V1134 | 村田蔵物語 ～名曲「影を慕いて」誕生 秘話～ | 10分 | 少年 一般 | 1995年度 | 村田町の商家ヤマシヨウの大沼幸七氏と、昭和を代表する作曲家・古賀政男 氏との友情秘話を通して、村田町に約300現存する蔵に残る歴史や思い出を 拾い集め紹介することによって、蔵などの古い建造物に関心を持ってもらう。 【制作者】村田町歴史みらい館 高橋定光 |
| V1297 | 夢の遺産 ～大河原一目千本桜～ | 20分 | 少年 青年 一般 | 1997年度 | 大河原の堤防の桜並木を、いつ、誰が、何のために、又並木にまつわる歴史 や思い出を紹介し、並木を守ることや関心を持ってもらうように制作されたも の。 【制作者】大河原町 大浦利昭 |
| V1431 | 桜並木の夢乗せて | 19分 | 一般 | 1999年度 | 10年ほど前から老化が進んできた桜並木を、いつ、誰がどのような目的で植 えたのか。また、老化の進んできた並木を、誰が、どのように、守り育ててい るのかを知ってもらい、もっと町民が桜並木を愛することを望み、作成した。 【制作者】大河原町 大浦利昭 |
| V1601 | 故郷を桜並木で飾る夢 | 20分 | 青年 一般 | 2001年度 | 長年にわたり、桜風景の父 高山開治郎さんのビデオ制作を続けても不明な 部分があり、ぜひ、完結編を制作したいと考えていたところ、今まで消息不明 と思われていた子息の豊太郎さんが元気であることがわかり、より詳しい内 容の話を知ることができました。そこで、町民の皆さんにも高山開治郎さんの 人柄、人生、行動が正しく理解され、未来に語り継がれることを目的に、高山 開治郎の完結編として制作されたもの。 【制作者】大河原町 大浦利昭 |
| V1602 | 二人三脚で・・・炭を焼く | 20分 | 一般 | 2001年度 | 七ヶ宿町は高齢化率38%と県内一になり、少子化、高齢化が一段と進んでい る中で、今年70歳と69歳を迎えた夫婦が、力を合わせて助け合いながら、昔 から続いてきました炭焼きを業としています。今年7月には新たな炭を焼く釜 作りをしています。その過程を紹介しながら二人三脚でがんばって炭焼きをし ている姿を紹介するもの。電気、ガス、石油等に押し流され炭を利用するこ とが少なくなった今日、長年続いてきた炭焼きの伝統を記録として残してゆき たいと考え制作した。 【制作者】七ヶ宿町 島津照夫 |
| V1883 | 金色の夢を追いかけて ～三宅物語～ | 20分 | 小学校(全般) 中学校(全般) 一般 | 2006年度 | これまでに、村田町教育委員会では町内ゆかりの偉人調査を行ってきた。今 回は、その調査を基に、メキシコオリンピックの重量挙げ競技において、兄弟 そろって表彰台に登った三宅兄弟の活躍を紹介する教材を制作した。目標に 向かって努力する姿を通し、夢を追い続ける大変さ、夢を持つことのすばらし さを再確認してもらえればと思う。夢を持つことをあきらめがちな今日、夢は 叶うと信じながら前向きに生きていってほしいという願いを込めて制作したも の。 【制作者】村田町視聴覚教材研究会 |

ス ラ イ ド 作 品

| 教材番号 (コード) | 教 材 題 名 | 時間 | 対 象 | 制作年・ 購入年度 | 内 容 |
|---------------|---------------------------|----------|----------|--------------|--|
| S0117 | 大河原のなりたち～大河原の歴史～ | 49コマ・20分 | 一般 少年 | 1979年度 | 江戸時代から現在までの大河原町の成り立ちを、尾形橋の変遷を追いなが ら、スライドで再現したもの。(ビデオ版：V0057) 【制作者】大河原社会科教育研究会 |
| S0131 | 大河原の歴史～六沼干拓～ | 40コマ・17分 | 一般 少年 | 1981年度 | 総延長17kmに及ぶ船岡用水の建設と、84haもの水田干拓事業を成し遂げ た先人の苦勞の跡を追いながら、郷土を拓いた人々の苦勞の重さに共感す る。(ビデオ版：V0063、DVD版：D0170) 【制作者】大河原南小学校社会科部 |
| S0132 | 角田用水 | 59コマ・20分 | 一般 少年 | 1981年度 | 角田用水が作られた理由と、作られた当時の工事の様子、その苦勞を知ら せるとともに、今も角田盆地の水田を潤す水を確保するための工事が続けら れていることを知らせる。(ビデオ版：V0239) 【制作者】角田小学校 斎藤 賢 |
| S0175 | 川崎町の歴史水を求めた人々～ケヤキ沢 用水～ | 45コマ・15分 | 一般 少年 | 1988年度 | 現在では、町の上水道の水源にさえなっているケヤキ沢用水を、明治初期に 完成させた人々の姿を捉えさせ、郷土を拓いた人々への興味、関心を引き出 す。(DVD版：D0178)【制作者】川崎小学校腹帯分校 佐藤俊雄 |

| 教材番号 (コード) | 教 材 題 名 | 時間 | 対 象 | 制作年・ 購入年度 | 内 容 |
|---------------|----------------------|----------|-------------|--------------|--|
| S0176 | 新天地を求めて-白石片倉士族北海道開拓- | 44コマ・18分 | 一般 少年 | 1988年度 | 武士が支配した江戸時代が終わった明治時代初期、白石の片倉藩士たちは北海道へ渡った。彼らが何を求め、何のためにはるばる海を渡ったのか。この作品は、白石片倉家中旧武士たちの北海道移住開拓の記録を基に、今日の発展の基礎を築いた先人たちの足跡と苦勞を明らかにしていく。(ビデオ版:V0503) 【制作者】大河原町自作視聴覚教材制作グループ 高野邦雄 |
| S0178 | 村田商人の草分け～山田備後～ | 49コマ・20分 | 一般 少年 | 1988年度 | 村田は、江戸時代後半から命じ・大正時代にかけて仙南地区の商業の中心であった。古文書を紐解くと、村田商人の草分けとも言える山田備後の姿が見えてきた。山田備後の生涯と、その当時の生活の様子や人々を紹介した作品である。(ビデオ版:V0314) 【制作者】小室かつゑ |
| S0192 | 丸森の灯～菊地太兵衛～ | 50コマ・22分 | 一般 少年 | 1992年度 | 菊池太兵衛の話は、自分の命を犠牲にして百姓を救った義民太兵衛として、町の高齢者の中で知られている。それというも、大正時代に一部の人たちによって物語風にまとめられたもので、土気の高揚や政治的に利用されていたようである。(DVD版:D0177) 【制作者】丸森自作教材グループ 代表 及川義行 |
| S0193 | 阿武隈川の舟運 | 61コマ・22分 | 一般 少年 | 1993年度 | 江戸時代から明治・大正の時代まで、阿武隈川は舟運が盛んであった。この阿武隈川の舟運を、いつ誰が、どんな目的で始めたのかを紹介した作品。 【制作者】鈴木俊光 |
| S0194 | 澄川用水 | 51コマ・20分 | 一般 小学校4年 | 1993年度 | 村田町内の澄川用水は大正時代にこの地域の人々が干害に悩まされ、昭和時代の初期に苦心の末、作った用水である。当教材には、4年生の社会科の学習教材として、児童が地域のために尽くした先人の働きを紹介するものが入っている。この内容を理解するために、地域素材として澄川用水を取り上げ、教材化した。(DVD版:D0164)【制作者】村田第一小学校澄川用水研究会 日下嘉充 |
| S0197 | 旗巻古戦場と細谷十太夫 | 34コマ・34分 | 一般 少年 | 1993年度 | 丸森地区大内地区の南東部、福島県境の旗巻峠は、戊辰戦争の激戦地であった。惨敗を喫した仙台藩にあって、ただひとり官軍に恐れられた男・細谷十太夫の痛快な生き方と、彼が率いた鳥組の活躍を伝えることを狙いとして制作された作品。(DVD版:D0176)【制作者】大内小学校 越坂雅彦 |
| S0198 | 佐野製糸場-明治を支えた女工たち | 50コマ・18分 | 一般 少年 | 1994年度 | 佐野製糸工場は、明治18年、佐野理八によって丸森町金山に建てられた。以後52年間、良質の生糸を生産し、アメリカへサノカンパニーシルクとして輸出するほどの大工場となる。その工場の繁栄を支えたのは日夜働く女工たちであり、現代の労働条件に比べれば必ずしも楽とは言えないものであった。この女工たちの足跡をたどり、佐野製糸工場とはどんな工場であったのかを明らかにしていく。(ビデオ版:V1067) 【制作者】丸森小学校自作教材制作グループ 井上竜一 |

D V D 作 品

| 教材番号 (コード) | 教 材 題 名 | 時間 | 対 象 | 制作年・ 購入年度 | 内 容 |
|---------------|----------------|-----|-----------------------------|--------------|--|
| D0160 | 職人の技 下駄づくり | 15分 | 小学校(全 般) | 2008年度 | 本教材のサヨシ履物店佐藤義治さんは、すべて手作業で下駄を作っている全国でもほんの数人しかいない職人である。佐藤さんの職人技に興味をもってほしいという願いを込めて、下駄づくりの制作工程を中心に構成した。子どもたちには、見学後、見落としたり、よく分からなかったりした場合もこのビデオから振り返ることができるものとした。また、学校教育に限らず、地域の方々にも職人技を伝えたく、かつ、後世に残したく制作した。 制作:大河原南小学校教諭 齋藤和志 |
| D0164 | 澄川用水 | 20分 | 小学校4年 | 2008年度 | 村田町内の澄川用水は大正時代にこの地域の人々が干害に悩まされ、昭和時代の初期に苦心の末、作った用水である。当教材には、4年生の社会科の学習教材として、児童が地域のために尽くした先人の働きを紹介するものが入っている。この内容を理解するために、地域素材として澄川用水を取り上げ、教材化した。 制作:村田第一小学校 澄川用水研究班スライド作品、S0194「澄川用水」をDVD化したものです。 |
| D0170 | 大河原町の歴史 ～六沼干拓～ | 17分 | 一般 少年 | 2008年度 | 総延長17kmに及ぶ船岡用水の建設と、84haもの水田干拓事業を成し遂げた先人の苦勞の跡を追いながら、郷土を拓いた人々の苦勞の重さに共感する。制作:大河原南小学校 社会科研究部 及川義行スライド作品、S0131「大河原町の歴史～六沼干拓～」をDVD化したものです。 |
| D0174 | 善右衛門と角田用水 | 15分 | 一般 小学校(全 般) | 2008年度 | 現在の上水の原型は、幕末から明治にかけて全国的に行われた治水工事によるものとする。角田では、旧角田町の高山善右衛門が治水工事のリーダーとなり、角田用水を完成させたことが分かっている。本教材では、善右衛門の生い立ち、善右衛門と角田用水のかかわり、当時の水不足による人々の苦勞、用水ができたことによる稲作や生活の改善などを事実をもとに描いた。そして、本教材を「総合的な学習の時間」や社会科の「郷土を開く」などの学習に利用していくと考えた。制作:角田小学校 大脇賢次 |
| D0175 | 戊辰戦争と角田 | 20分 | 高等学校(全 般) 中学校(全 般) | 2008年度 | 「戊辰戦争の碑」やその他の資料から、戊辰戦争と角田がどのような係わりがあったのか、角田の中・高校生に地域の歴史に興味を持ってもらいたいと考え、このスライドを制作。制作:角田小学校自作教材制作グループ 逢田義廣・大脇賢次スライド作品、S0206「戊辰戦争と角田」をDVD化したものです。 |

| 教材番号 (コード) | 教 材 題 名 | 時間 | 対 象 | 制作年・ 購入年度 | 内 容 |
|---------------|--------------------------------------|-----|-------------|--------------|--|
| D0176 | 旗巻古戦場と細谷十太夫 | 34分 | 一般 少年 | 2008年度 | 丸森地区大内地区の南東部、福島県境の旗巻峠は、戊辰戦争の激戦地でした。惨敗を喫した仙台藩にあって、ただひとり官軍に恐れられた男、細川十太夫の痛快な生き方と、彼が率いた烏組の活躍を伝えることを狙いとして制作された作品。制作：大内小学校 越坂雅彦スライド作品、S0197「旗巻古戦場と細谷十太夫」をDVD化したものです。 |
| D0177 | 丸森の灯 ～菊地太兵衛～ | 22分 | 一般 少年 | 2008年度 | 菊池太兵衛の話は、自分の命を犠牲にして百姓を救った義民太兵衛として、町の高齢者の中で知られている。それというのも、大正時代に一部のの人たちによって物語風にまとめられたもので、土気の高揚や政治的に利用されていたようである。制作：丸森自作教材グループ 代表 及川義行スライド作品、S0192「丸森の灯～菊地太兵衛～」をDVD化したものです。 |
| D0178 | 川崎町の歴史 水を求めた人々 ～ケヤキ沢用水～ | 15分 | 小学校4年 | 2008年度 | 現在では、町の上水道の水源にさえなっているケヤキ沢用水を、明治初期に完成させた人々の姿を捉えさせ、郷土を誇った人々への興味、関心を引き出す。制作：川崎小学校腹帯分校 自作教材制作グループ 代表 佐藤俊雄スライド作品、S0175「川崎町の歴史 水を求めた人々～ケヤキ沢用水～」をDVD化したものです。 |
| D0180 | 角田用水 | 20分 | 一般 少年 | 2009年度 | 角田用水の作られた理由と、作られた当時の工事の様子、その苦勞を知らせるとともに、今も角田盆地の水田を潤す水を確保するための工事が続けられていることを知らせる。 制作：角田小学校 斎藤 賢 スライド作品S0132「角田用水」をDVD化したものです。 |
| D0279 | 稲作の水を求めて～黒沢尻用水～ | 17分 | 一般 小学校4年 | 2009年度 | 地域の水田を潤している用水は、なぜ蔵王山の澄川から引いてくるのか、松川と白石川の酸性が強い水を避けて、先人たちが稲作に適した水を求め、用水を作り上げた苦勞を映像資料として教材化。 小学校4年社会「きょう土につたわるねがい(山ろくに広がる用水)」 この教材はビデオ教材VO132をDVD化したものです。 |
| D0335 | 神になった侍 ～山家清兵衛と宇和島～ | 17分 | 一般 | 2010年度 | 伊達政宗の長男、秀宗が宇和島(現在の愛媛県宇和島市)に赴くにあたって政宗は秀宗の補佐役として山家(やんべ)清兵衛という侍を家老として従わせました。宇和島復興に清兵衛が果たした役割と、神社に祀られることとなるまでの経緯を紹介します。また、その子孫の山家豊三郎が、明治時代に自分の屋敷を開放し、元武士や庶民に店を開かせ、現在の仙台市一番町商店街の基礎を作ったこともあわせて紹介します。 制作：大河原町自作視聴覚教材グループ 大浦利昭 及川義行 |
| D0340 | 揚水翁 毛利萬之助 | 15分 | 小学校4年 | 2010年度 | 角田市枝野地区では、灌漑用として江戸時代にため池が造られ、その水を使って稲作がおこなわれていた。しかし、ため池だけでは、稲作用の水が足りず、農民の生活を悩ませていた。このことを何とかしようと考え実行に移した人物が毛利萬之助である。地区の人びとは、萬之助の偉業を後の世にも残そうと石碑に記した。この石碑の碑文をもとに制作しようと考えた。 単元：郷土を開いた人々 制作：柴田町立東船岡小学校 大脇賢次 |
| D0410 | 彫刻に一生をささげた人 小室 達 | 18分 | 小学校6年生 | 2011年度 | 本作品は、宮城県仙台市の青葉城址にある、伊達正宗騎馬像の制作者である郷土の彫刻家 小室達(こむろとおる)の事実に基づいた物語である。小室の郷土に対する思いや、彫刻や騎馬像をつくる時の努力や苦勞、表現に対する考え方などを映像を通して子どもたちに理解させ、小室達の思いに共感させる。そして、道徳教育の価値である「郷土を愛する心」や「美しいものや気高いものに感動する心」を子どもたちに考えさせたい。 利用領域：道徳 郷土愛・畏敬の念 制作：柴田町立東船岡小学校 大脇賢次 |
| D0411 | 戦国大名 伊達植宗と丸森 | 18分 | 一般 | 2011年度 | どの町にも堂々とした先人たちの歴史遺産が様々な形で残されている。この歴史遺産を知ることによって、郷土を愛し、町民の連帯感を培い、町の歴史に誇りを持てるような契機になることを願って作品を制作した。 制作：丸森町 齋藤良治 |
| D0414 | 本邦初のコロナ観測 明治20年宮城県柴田町で 観測された日食 | 13分 | 一般 | 2011年度 | 明治時代に入って初めての皆既日食が、明治20(1887)年8月19日にあった。明治政府が国家的事業と位置付けた、この日食観測を宮城県柴田郡人間野小学校(現槻木小学校)の教員が観測、記録し、日食報告書として文部省に送った。その報告書の発掘の経緯や観測者、観測場所の特定、時代背景等を紹介した。 制作：柴田町星を見る会 豊川光雄 |
| D0415 | 真田幸村と蔵王町 ～受け継がれた武將の生き方～ | 16分 | 一般 | 2011年度 | 大坂夏の陣で、豊田家が滅亡し徳川幕府による政治が本格的に始まった。この時に敗者となった西軍の豊田家臣に真田幸村(信繁)がいる。最後まで豊田方として尽くした幸村だったが、最後の決戦の前に自分の子どもたちを東軍の徳川方伊達正宗の家臣片倉小十郎重綱(重長)に託す。三女阿梅(おうめ)は、片倉重綱の妻となり、二男大八は、片倉守信と名乗り、伊達家の家臣となる。守信は、蔵王町の矢附、曲竹地区に領地を与えられ、代々この地を治めた。本教材は、苦難を乗り越えながら戦国の世を生き抜いた真田幸村とその子孫の生き方を理解するとともに、自分たちが住んでいる地域の昔の様子を知ってほしいと考え制作した。 制作：蔵王町立永野小学校 鈴木哲也 |

| 教材番号 (コード) | 教 材 題 名 | 時間 | 対 象 | 制作年・ 購入年度 | 内 容 |
|---------------|-------------------------------|-----|------------------|--------------|--|
| D0416 | 新天地を求めて ～白石片倉氏族北海道開拓～ | 18分 | 一般 | 2011年度 | 武士が支配した江戸時代が終わった明治時代初期、白石の片倉藩士たちは北海道へ渡った。彼らが何を求め、何のためにはるばる海を渡ったのか。この作品は、白石片倉家中旧武士たちの北海道移住開拓の記録を基に、今日の発展の基礎を築いた先人たちの足跡と苦勞を明らかにしていく。(スライド教材S0176をDVD化したものです。) 【制作者】大河原町自作視聴覚教材制作グループ 高野邦雄 |
| D0417 | 大河原の生んだ歌人 ～佐藤佐太郎～ | 19分 | 一般 | 2011年度 | 名実ともに昭和短歌界の第一人者であった佐藤佐太郎の歌碑が大河原町内にあるが、その佐太郎が大河原町内の出身者であることを知る人は少ない。そこで大河原で生まれた佐太郎の生い立ちと短歌の繋がり等について、録画教材化した作品。(V0701をDVD化したものです。) 【制作者】大河原中央公民館、大河原町自作視聴覚教材制作グループ |
| D0419 | 大河原の柳人 薫 作太郎 | 18分 | 一般 少年 高齢者 | 2011年度 | 大河原の柳人 薫作太郎の川柳と功績について町民に知らせるとともに、世相や心の動きを読む川柳の楽しさを味わわせたい。 制作:大河原町自作視聴覚教材制作グループ 小室かつ彥 及川義行 齋藤和志 |
| D0420 | 大河原町の生んだ詩人 尾形亀之助 ～その虚無の世界～ | 20分 | 中学校 高等学校 | 2011年度 | 明治時代後半から大正・昭和時代に生きた大河原町出身の詩人・尾形亀之助。彼は醸造業を営む旧家の長男に生まれたが、鋭い感性の赴くままに詩作と絵に没頭し、いつしか「虚無」の虜になっていく。彼の歩んだ人生と、彼が見つめ続けた「虚無」の世界を、彼の詩を通して紐解いていく。 制作:大河原町自作視聴覚教材制作グループ |
| D0421 | ～宇和島藩と伊達秀宗～ 将軍と大名 | 19分 | 小学校6年 中学校(全般) | 2011年度 | 伊達政宗の長男・秀宗が、将軍の命令により宇和島へ入封するという歴史的事実を通じて江戸時代の将軍と大名との関係を描く。徳川家と大名の関係を「人質」「大名配置」「改修工事の割り当て」の3点に焦点を当てて制作してある。【制作者】金ヶ瀬小学校教材制作グループ 小室かつ彥 |
| D0427 | 白石和紙と紙すき工人 | 20分 | 少年 一般 | 2011年度 | 白石和紙の製作工程を、ただひとりの制作者となった遠藤忠雄さんの作業を通して説明している。(スライド教材S0161をDVD化したものです。) 【制作者】白石市婦人ボランティアサークル 大原美恵子 |

おわりに

「夢をはぐくみ，志に高める」

みやぎの志教育プランのリーフレットにあるキーワードです。

大河原教育事務所では，当所管内の「志教育」を推進するにあたり，夢をはぐくみ，志に高め，そして成し遂げた先人の生き方や業績を資料としてまとめ，小・中学校で役立ててもらおうと考えました。

今回の資料作成にあたり，各教育委員会や小・中学校へ原稿を依頼したわけですが，次のような感想が寄せられました。

「資料作成にあたり，公民館や地域を取材する中で，この学区にもたくさんの偉人がおり，どの方も庶民的で情に厚く魅力的であることに気づかされました。一人にしぼることがとても難しかったです。今後，児童たちに還元していきたいと思います。良い機会を与えていただき感謝いたします。」

世界の偉人や歴史上の有名な人物について学ぶことも大切ですが，私たちの身近なところにも「生き方」を学べる人々がたくさんいることが分かります。地域の偉人と呼ばれる人々の郷土に対する熱い思いや周りの人々に対する深い愛情などが，子どもたちの心に，よりスーッと入っていくのではないのでしょうか。学校に，「この人，僕の親戚なんだよ。」と自慢げに話す子がいるかもしれません。

本冊子「大河原教育事務所管内の偉人～夢をもち，志を成し遂げた郷土の人々～」は，子どもたちが自らの「生き方」を主体的に探究することができるように願い作成したものです。子どもが読むには難しい文章が多いので，指導する先生方には，「みんなの住んでいる地域には，こんな人がいたんだよ。」と各教科，道徳，総合的な学習の時間で取り上げたり，調べ学習のデータベースとして活用したりしていただければと思います。

最後に，お忙しい中，資料を作成していただきました先生方，教育委員会の担当者の方々，また，御協力いただきました関係者の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

大河原教育事務所

志教育参考資料集

大河原教育事務所管内の偉人
～夢をもち、志を成し遂げた郷土の人々～

平成24年2月 6日 印刷

平成24年2月15日 発行

編集 宮城県大河原教育事務所

発行 宮城県大河原教育事務所

住所 〒989-1243 宮城県柴田郡大河原町字南129-1

電話 0224-53-3111

印刷所 株式会社 津田印刷

住所 〒989-1236 宮城県柴田郡大河原町字東原町13-5

電話 0224-52-5550